

東京女子高等師範学校内会
日本婦人雑誌園協議會

幼兒の教育

主編

三編集

第 八 號

第 三十二 卷



理學 博士 川口銳之助 先生 著 文部省検定出願中

二年版

ローマ字第一讀本

社會の進歩と共にローマ字の必要は、日に月に加はり、子供達のローマ字を求める熱望も漸次高まつて行くやうに思はれます。日本將來の爲め、此の際第二の國民たるべき一般少年少女達に、ローマ字の知識を與へることは極めて大切な事である存じます。本書は最も完備した初學用ローマ字讀本として兩先生の苦心編纂に成れるもの、現に全國各地の小學校、補習學校で、ローマ字教科書として本年度採用學校數四百八拾六校、冊數貳十三萬部の多數を印刷致しました。第一學期の兒童補習には是非御使用をお勧めします。

ローマ字第一讀本	價金二十五錢
ローマ字第二讀本	價金二十五錢
ローマ字第一讀本〔教師用〕	價金二十五錢

發行所 教文書院

東京上野公園寛永寺坂下（上根岸八十八）
電話下谷三〇四七番
摘要東京四六一一番

木村鷹太郎先生兩著

刊 新

來る八月一日發賣

前發賣

申込引受

洋天定價送
料三十二錢
四圓五拾錢
金頗美る本製

詩評傳
ハイ

洋天定特價參料
金價頗金圓五十
布る參料二十二
美四拾五十五
製本圓錢錢

**賣切れ
中の處 増刷出來**

發兌東盛堂全國書林

通町形人橋本日京東
番六〇五七京東替振

育兒の教 第八號

卷三十二第 次 目

東西洋の子守唄	文學博士 松村武雄
ある奥さんとの話	主幹 倉橋惣三
子供の心	天野誠齋
衛生 子供の夏の旅行に際して	兵生
途上劇 子供すき	三雲
子供に塗り繪と貼り繪	K M 生
童話 小さい音樂家	及川ふみ
童話 大きなお日様	山崎みつ子
遊戯 大きなお日様・かけくら	元
児童彫塑展覽會を見て	作曲
詩 生長する環境	茂木由子
家庭 おもちゃ箱から	一三
製作 おもちゃ箱から	土川五郎
鳴く蟲の話	倉橋一生
萬國幼稚園案(横書き)	橋爪健
協會案(横書き)	三
海外幼稚園・小學校の初等年級のプロセクト	藤五代策
記事 幼稚園・小學校の初等年級のプロセクト	四
長編 小說お春	平島權藏
雜報	七
本誌記者	七
記者	七
者	六



東京女子高等師範學校
附属幼稚園保育

阪内みつ子先生著

子供の遊ばせ方

四六版美本 一近刊一

ここは中々難しいが又愉快なものである。

幼児教育の理論と實際に精通した著者の、子供に對する遊ばせ方の研究書であります。學校でも家庭でも備ふべき良書として御勧めします。

子遊ばせ方をる

次 目

子供を遊ばせるといふ意義
子供の好きな遊びの種類
子供の好みの玩具の種類
選定の標準
遊び法

室内遊び
團體遊び
おしゃべり
個人的遊び

以 下
數 十 項

發行所

東京上野公園
寛永寺坂下

教文書院

電話下谷三〇四七番
振替東京四六二二一番



ルンケ筆

—朝—

新らしい日光と、新らしい空氣と、

天地の新らしい生動に躍る朝。

身は地の草に臥てゐるが、仰ぐ目は圓らに、
蒼空の高き光を宿して居る。

小さい足には力を籠めて土の面を蹴り、
短かい両手は張り伸し、振り動かして、

際限を知らぬ自由な無極を追ふて居る。

健かる子どもの皮膚に反映する、

朝の光線の軟い光澤。

生ひ茂る草の葉に漲る、

自然の生長の強い色—

さすがに、戸外畫家の祖ともいはれるルンケの
特色が充分に出て居る。ルンケは獨逸ハングル
ビ派に屬する若い畫家であつた。(倉橋生)

廣原社第一回兒童影塑展覽會作品

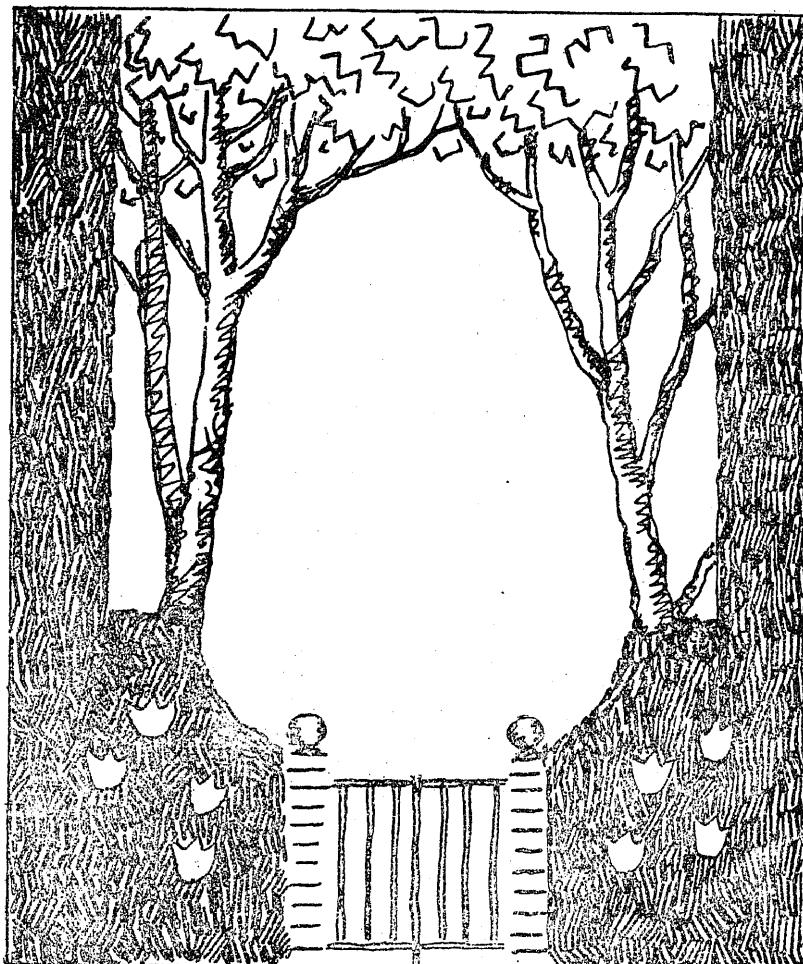


(記事參照)

東京女子高生學範師校內
日本幼稚園協會

幼兒の教育

主幹 倉橋 惣三



第 八 号

1923

第十二卷

東西洋の子守唄

文學博士 松 村 武 雄

伊太利のエヴェリン・マルチネンゴ・セザレスコ伯爵夫人が、その著「民謡の研究」(Essays in the Study of Folk-Songs)のうちに云つたやうに、幼年期は、一種の大きな神祕である。われわれはすべて人間生活の一時期として、幼年期を経過してゐる。しかも大人になつた今日から、この時期を回想して、はつきりとその時代を心の中に實現させることは、なかなか困難である。或は觀察により、或は直覺により、或はまた經驗によつて、この無邪氣な神聖期を幾分かは眼前に彷彿させることが出来るかも知れないが、概して云へば、幼時に關する思い出なるものは、朝の夢のやうな混亂し稀薄化した記憶である。朝の夢が、一方の端は、眠の無意識界に連なり、他方の端は、鶯醒時の現實と相混融してゐるやうに、幼時の回想も、いろんな他の分子によつて不純にせられ、稀薄にせられ、朦朧化せられてゐることを拒むことは出來ぬ。

しかし、幼年期の特徴として、われわれが可なり確かに知つてゐることは、幼兒が、少年少女期や、青年期や、大人期なきの人間に比して、遙かに非物質的であり、遙かに少ない合理性の持主であるといふことである。そしてこのことは、やがて彼等の世界が、童謡を心から受け入れる世界であることを示すものでなくてはならぬ。なぜなら童謡の世界は、純情と想像との世界であり、ものみなに生命を認める世界であり、マテリアルな考力を排斥する世界であるからである。

それから幼兒はまた韻律に對して、大きな愛好を示すものである。セザレスコ伯爵は、

「幼兒は、節奏ある騒音を喜びます。その騒音が、言葉の形をとるにしろ、音楽の形をとるにしろ、若くは多くの健

のかち合ふ音にしろ。」

と云つてゐる。未開人が詩を通しての自己發表の階段に達する前に、單なる律動によつての自己發表の手段を發見したやうに、兒童も、幼い時代には、詩を持つ前に、先づ律動を持つてゐる。幼兒の律動感は、その生活に著しく現れてゐる。彼等はスプーンで食卓を叩いたり、手に持つ棒ぎれで橡板をうつたりして、そこに生ずる律動を享樂してゐる。メードライン・アルストン氏はその兒童詩論に於て、

「印度の兒童は、心が満足してゐるときには、走り廻ることをしないで、不規則な方法で噪音を立てる。そして彼は一種の騒寝に居るかのやうに、獨坐してそれを楽しんでゐる。ポン／＼賣が彼に小さなトム／＼を貸すと、彼はあぐらをかいて、トム／＼を膝の上に置いて、頻りに打ちつけた。……象の秣の中でたつた一人で、調子も言葉もなくて、たゞもう打つゝが、彼の機嫌をよくした。」

とも云つてゐる。そしてこの事實がまた、幼兒の世界をして童謡の世界たらしめる一因である。何故なら、童謡は、幼ない、素樸な韻律^{リズム}を持つことを特徴としてゐる一種の詩である。

そして、さまざまの形式の童謡のうちでも、子守唄が最も早く幼兒に味はれる。子守唄は他の童謡が持たないいろいろの或るものを持つてゐる。それは母若くは子守女である。幼ない子供は一人で童謡の世界に足を踏み込むには、あまりに幼弱に過ぎてゐる。子守唄はよくその缺陷を補うてゐる。子守唄は、母の、若くは子守女の唇を通して、乳房と一しょに、若くは眼をさそう節奏的な身體の動搖^{リズム}一しょに、幼ない兒に與へられる。そこには他の童謡が持ち得ない、涙ぐましい、なつかしい、甘い夢のやうな味が湧く。

幼兒の心は、未開人の心と相通うてゐる。フイヤーカント氏は、その著「自然民族と文化民族」(Naturvölker und Kulturvölker)に於て、未開人の意識活動を不隨意的意識活動であるとして、文化人の隨意的意識活動から區別した。[幼兒の心の

東西洋の子守唄 (4)

動きも、不隨意的意識活動である。彼等の心的活動は、個性的要素が少なくて、類型的要素が多い。大人のやうに、個々に分化し複雑化した経験や、意考の作用を蒙る程度が、比較的に少ないのである。だから彼等の心の糧であるところの子守唄も亦、東西洋を通じて太だ著しい類似を示してゐる。

子供の眠は、一個の *infantile virtue* である。幼ない子供が、すやすやと眠ると、「いい」は、その親の安心であり、慰藉

であり、歓喜であるといふ意味に於て、子供の眠はやがて子供の善行でなくてはならぬ。

かくて子守唄に於ては、「よく眠る」^{シレル}との報賞として、子供の心を喜ばすかまくのものが約束される。これが東西洋の子守唄を貫く一通則である。日本の子守唄を見よ。

ねんねこよ、ねんねこよ。

ねんねのもりは、何處へ行た。

あの山越えて、里へ行た。

里の土産に何もろた、

でんでん太鼓に笙の笛、

起上り小法師に大張子………

さあるではないか。これと同じやうに、英吉利の子守唄では、船一ぱいの玩具が約束せられ、伊太利の子守唄では、兎の皮が眠の褒美^{アーモード}になり、佛蘭西のフランダース地方では、蜜と香料とライ麦の粉でこしらへた菓子、綺麗な着物等が、眠れるものへの約束品となつてゐる。

Un jour un' pauv' dentillière

En amiclon ch'uu petiot garchun

Qui d'puis le matin n'fesions que blaire,

Voulait l'endormir par une canclun.

ところ、方に満ちた子守唄はそれである。それから希臘の子守唄は、その一つは眠に對する報賞の品の美しさで、他の一つは賞品の大あれど、何の種の童謡中の一大異彩でなくてはならぬ。曰く、

ねんねよ、ねんねよ。

お前のおかさんが歸つたら、

河のぼりの月桂樹。

岸のぼりの百の花。

薔薇、^ニ石竹を上げませう。

は、その一つであり、

ねんね子よ、ねんね子よ、

砂糖のかはりにアレキサンドリア、

おままのかはりにカイロ府、^{モモ}

それからお前が三年も、

王わわ 殿さまになるやへよ。

ロンスタンチノーブルを上げませう。

は、他の一つである。

報賞から責罰へは、ほんの一步である。幼ない兒のよき眼が、養育者の安心歡喜にして、わあべーの報賞を豫約せられ

るやうに、いつまでも泣き、且つすねて眠らない子供は、養育者の苦惱として、責罰を提示せられざるを得ないのである。眠らざるものへの責罰の豫告には、さまざまの種類があり、さまざまの度合がある。この點に於ても、眠るものへの報賞と好罰の對比をなしてゐる。獨逸の子守唄に云ふ、

ねんねよ、赤ん坊、ねんねしな、

小ちやい羊が二西づれ、

あれへ向ふからやつて来る。

一つは黒くて、他は赤い。

もしも坊やが眠らぬと、

始めは黒が、つぎに白が、

坊やの小指を噛みますよ。

の如きは、子供への脅威に使はれるものが、いかにも優雅で、子供はこれに對して脅威を感じずよりも、寧ろ好奇心を感じて、それが爲めに猶更眼を大きくして、覺めつゝけるだらうとも思はれる。われわれは、そこに兩親の慈愛——假面的な脅威の底に潜む慈愛を看取し得て、云い難い子守唄の妙趣を味はせられる。

しかし子供に對する眞の脅威も少くない。脅威に拉し來られるものは、多くの國の守子唄に於て、一種の妖魔である。歐洲諸國では、bogey といふ怪物がよくかつぎ出される。日本の子守唄にも「山下坊主の目が光る」さいふのがある。若くはある民族の憎惡と戰慄の標的となつてゐる歴史上の人物が、toggie の代りを演ずる。佛蘭西の子供に對してウエリントン若くはビスマークが、英國の子供に對してナボレオンが、朝鮮の子供に對して加藤清正が提示せられるが如きは、その好罰の例證である。昔佛戰爭當事巴里の都によく歌はれた子守唄に、

As-tu vu Bismarck

A la porte de Chatillon?

Il lance les obus

Sur le Panthéon.

といふのがいたりに、事實には、何人も微笑せざるを得ないであら。

それから或る個人でなくして、或る民族全體が、眠らない子供への脅威に利用せられることがある。ムーア人は、南歐を荒し廻つた民族であるが故に、南歐の子守唄には、よくムーア人が現れて、眠らぬ子に對して目をむく。まだシニオル・アヴオリオ (Signor Avolio) の「ハトの民謡」(Canti popolari di Noto) には、

「狼が来るよ」から、言葉の外に、「静かになれい、希臘人が来てねおあぶ」から、「外へ出るな、希臘人がるるから」

といふ言葉が、子供を脅すために、屢々彼等の母によつて使はれる。

と書いてある。それはノトの地は、屢々希臘人の侵略に苦しめられたところであるからである。

アヴオリオが云つたやうに、動物を拉し來つて眠らぬ子をおさすのも、子守唄に共通な一個の手法でなくてはならぬ。羊が來て小指を咬むことを歌つた獨逸の子守唄は先に擧げた。狼が来るといふ嚇し文句は、歐洲の子守唄に廣く現れる。日本でもこの種の子守唄に決して乏しくない。「日本歌謡類聚」下巻に収めた伊勢の子守唄に、

ねんねんねんねこせ、

ねんねこ山の雉の子、

泣くとお鷹が捕つて往く。

ねんね。

があるが如き、これである。(續く)

東西洋の子守唄 (上)

ある奥さんとの話 教育問答（二）

主 幹 倉 橋 牆 三

家庭の教育

客 今日は家庭教育のことに就て、お伺ひに出ました。

主 なにか六かしいことでありますか。

客 六かしいどころか、どうしたらよろしいのか、分らなくなつて仕舞ふので御座います。

主 どうするとは、

客 家庭教育をで御座います。子供もの教育は、家庭が一番大事だといふことは承知いたして居りますが、それがなかへうむく参りませんのです。

主 うまい。

客 はい。何しろ私たちの家庭では、学校のように時間があちん／＼出来ませんで。

主 時間が。

客 せめて、毎日一二時間づゝでも、子どもの間にかゝりつきりに、なつてやり度いで思ひましても、

主 さようですか。まあ、今なすつてらつしやることをお話し下さい。

客 お聞きを願ふ程のことも致して居りませんが。なんでも御座います。ふた月程前から、子どもの時間割といふものをこしらへまして。

主 なるほど。

客 学校から歸つて参りますご、其の日の復習と明日の豫習をいたしてやります。
結構ですね。

客 しかし、それだけではいけない存じまして、先達も家庭教育の中心は、精神の教育にあることか或る

先生のお話で承りましたし。

主 なるほど。

客 隔日に一度づゝ、訓話をいたしてやることにしました

のです。

主 ははあ。訓話をとおつしやいますと

客 子どもの缺點を諒めましたり、修身のいゝお話を聞かせましたり。

主 お子さんは、よくお聞きですか。

客 ここにかく、其時だけは私も厳しくいたして居りますので。

主 それで。

客 聞いては居りますが、ほんとうによく分つて呉れます

か、それが心配なので御座います。毎度、前に話してや

りましたことを質問して見ます。大體、あまり、とん

ちんかんの答へもいたしませんけれど。

主 たゞへば。

客 さようですね。たゞへば、親切にはがうぐふうです

といつた風に。

主 何ごお答へです。

客 人に親切にする、すこいふ風に答へます。

主 え。

客 目下のものなどにも、親切にしてやることです。答へます。

主 なるほど。

客 なにね、そつ教へてあります通り答へるんで御座いますがね。

主 でしようね。

客 答へは、それでよろしいですが、そう覚えて居ながら、女中なきに對して、ちつとも實行いたしませんので困ります。

主 ははあ。そうでじょうね。

客 ですから困るんで御座います。

主 復習や豫習の方は。

客 それも、實際は、なかなか思ふ通りに參りませんで困

ります。

主 何故ですか。

客 私もでは、随分いろんな用事のあります方で、それに、客が多いのですから、私もなか／＼時間割通りに参りませんで。

主 さようでしようとも。

客 そうすると、其の日は一日、家庭教育が豫定通りいきませんのです。

主 一寸お待ち下さい。(もし／＼、うなだ。そう。そう。
え。あゝそうですか。よろしい。そうさせませう。承知しました。では、また明日いづれ。さようなら)——いや失禮しました。

客 何か急の御用事でも。

主 いゝえなし。もう宅に居ました男が、今度、アメリカへ赴任して行くことになりましてね。子供も達も、其の男には小さい時から親しくしました。子供も心に、今度の成功を非常に喜んで居るんですから、船まで見送らしてやうといふ相談なんです。十二時の解纜ですか

ら、學校を休ませなければなりませんが。

客 それは結構で御座いますね。しかし、なんですか、そういうふ時には學校をお休みにおさせなさいませんですか。

主 いゝでしよう。折角く子供も達の心もあが、その男の門出を大に祝福してるといふ譯なんですから、はゞよ。

客

主 意義のある場合には、臨時に學校を休ませたつてよろしいでせう。斯ういふ場合でないこ、斯ういふ心の経験をさせるには出来ませんからね。

客

主 それに妹の方の奴が、まだ大きい汽船の内部を見たことがないので、見せてやろうといふのです。それに、お船なんかに乗つて行つて、あぶなくないと、其の男のために心配して居ますしね。

客 お可愛いこと。お船を御覽になるのもおためになります。此の間も、宅の子供もが、學校の先生に横須賀へ連れて行つて頂いて、いろんなことを覚えて参りま

した。

主 船の知識だけなら、いつでも見せてやれますかね。現に自分の親しい人が乗つてゆく船といふこ、また別の感じが伴ひますからね。知識それ自身でない。

客 お嬢さんも、あの大きい春洋丸を御覽になつたら、御安心なさいますでせう。

主 はよよよ。お船なんかに乗つて行つて、沈没したら大變だつて、えらく心配して居ますんで。此の間も、其男が暇乞ひに來た時皆で大笑ひなんです。その男も、や

さしい男でしてね。こんなに嬢ちゃんが心配して居て下さつては濟まない。どうか、船をお目にかけて安心して頂き度いなんて言つてしましてね。

客 それが、よろしう御座いますね。

主 ところで、奥さんのお話は。
客 長くお邪魔して相済みません。

主 いゝえ、ちつとも。

客 なんで御座います。そんな譯で、どうも、時間をきめた教育が、きちんと出来ませんのです。それに、善い行

ある奥さんの話（教育問答一二）

ひの話が分つても、實行になつて呉れませんのです。

主 失禮ですが、奥さんは、それは家庭教育じやありますんよ。

客 へつ。

主 失禮ですがね。奥さんは、家庭がする教育、家庭の中でする教育と混じていらつしやいませんか。

客 もう少し詳しくお詰願ひます。

主 家庭教育といふことは、私の考へでは、家庭生活が、子どもに與へる教育をいふので、理屈つぼく申します。家庭生活そのものが持つて居る自然の教育効果を實現するといふこ事ではありますまい。つまり、此頃の言葉でいへば、生活即教育ともいつていゝものではないのでせうか。奥さんは、奥さん許りじやありませんがね。家庭の中で、學校の教場式な教育を繰りかへしてゐらつしやるのではありますまいか。

客 はあ。

主 それも、決して悪いこ事ではありませんがね。それなら、何も特に、學校の教育で出來ないこ事が、家庭教育

ある奥さんとの話（教育問答—II）

三

で、そこ出来るといふ様なことが無くなつて仕舞ふでしやう。

客 学校教育で出来ないこと、おつしやいます。

主 学校は教育の場所ですがね。餘りに教育だけの場所なんですね。だから、学校が悪いとか、知らないとかいふのはありませんよ。学校といふところは、そういうふところとして必要なんです。しかし、学校には、現實の生活がありませんね。従つて生活の眞の實感も多くありませんね。此の點は今日の學校教育者も一番深刻に考へて居る問題なんですがね。兎に角く、それを、十分に、

學校に求めるることは困難でせう。ところが、それが、家庭にはあるんです。現實の生活が。家庭といふのは、家でも、また家族でもなく、生きた生活なんですからね。従つて、家庭でこそ、すべてが、生活の實感で動いて居る筈なんですね。子どもは子さも相當で。

客 子さにも、生活の實感を與へてよろしいのでせうか。

主 勿論、生活の種類にもよりますがね。しかし、實感なしの人間、實感なしの生活では、生活の教育も、人間の

教育も出来ますまいね。

客 それはそう御座いませうね。

主 こないだも、なんでしたよ。母が病氣しました時、私は二三日長女に學校を休んで、看護をさせました。學校を休ませるお話ばかりしますがね。それが自慢ではあります。母も家内も、これには反対で、看護婦も來ませんがね。母も家内も、これには反対で、看護婦も来て貰つてゐるのに申したんですね、私は、長女が學校で看護のこと教つてゐる時でしたから、其の實際を看護婦といつしょにさせたんです。

客 はあ。

主 これは、何も、そうしなければならないといふ譯ではありませんが。そりや學校でも、看護法の講義ばかりではなく、實習とかをするのですがね。人形の顔に吸入をさせたつてね。病人を心配するといふことが伴はない看病は、無實感ですからね。

客 面白いことをおつしやいます。

主 その時にもです。吸入を何ばいとかするところを、母が、もう疲れたから二はいにして置かうと言つたんだそ

うです。そ、うする、学校で教はつたのと違ふから、も
つこしなければいけない、娘が言つたんですつて。看護
婦も、もうおよしになつていゝでせうと止めたそうです
がね。尤も母も大して疲れる病氣でもなかつたもので
から、笑ひながら學理通りに従つたそ、うですがね。

客 ほ、く、く。

主 人形は、いくら風をひいても疲れませんからね。疲れ
るさいふことに思ひやりのない看病は、たまりませんね。
は、く、く。

客 さつき、お茶をおもち下さつたお嬢さまですか。

主 あれです。

客 お宅では、お子さま方に、お家の御用もおさせなさい
ますので御座いますか。

主 必ずとも限りませんが、まあ、させる方ですね。

客 宅では、主人が、子どもに、家の用なんか手傳はせて
はいけない。子きもは、勉強だけをさせて置かなければ
いけないことを申す主義で。

主 それも結構でせう。

客 しかし、なんだかお話を伺つて居りますと、家の用も
手傳はせた方が、よろしい様に存ぜられます。

主 私の家では、そうして居ります。尤も、強いてそうさ
せる譯でもあります。自分の目の前の用で、自分達
に出来るることは、自然する様な習慣になつて居ります。

客 矢張り生活即教育をおつしやいましたお考へからです
が。

主 なあに、そんな大した理論から出發したんじやありま
せん。なんだか、そうなつて居るんです。生活即生活
いふ位のところですかね。は、く、く。

客 これはどうも、大層長座いたしました。また、いろいろ

お話を伺はせて頂き度い、御座ます。

主 さようですか。今日は、ほんとうにお構ひいたしませ
んで、失禮しました。母も家内も女中達も、さつき申上
げた男の方へ、手傳いに行つて留守だもんですから。

客 お子さま方も。

主 はあ。

客 お上のお嬢さも。おあとから、いらっしゃいました

ある奥さんとの話（教育問答一）

11

んですか。

主 いゝえ、あれは、お客様まだからつて、参らずに居ります。

客 それは、さうも、お妨げしました。

主 いゝえ、なに。常子、お客様がお歸りですよ。

客 どうぞ、もう、そのまゝ。

主 さあ、まあ、どうぞ。また是非、みんなの居ります時

御ゆづくり。お子さんもお連れになつて。

客 あり難う御座います。是非お邪魔させて頂きます。お

嬢さんは、お丈夫そうであるらしくやいます」と、

主 はゞゞ、お蔭で、子ども達皆丈夫です。お宅では、

客 どうも、思ひ切つて丈夫の方ご参りませんで、

主 それは……なあに、子どもの身體はいろいろ變りますよ。しかし奥さん、あんまり、教育はなさらない方がよ

ろしう御座いますよ。はゞゞ。

客 ほゞゞ、これから、そういうふうにござりませう。
……では、御免蒙ります。

主 さようなら。

男子にしろ、女子にしろ、なして價値ある仕事をする人のみが、眞に生活し、呼吸し、睡眠する意義をもつてゐる人である。

その人の心は常に仕事の中に生き、願ふところは、仕事をよく爲し、且つよく爲し丁へた事に依つて報賞を感じる望みである。
かうした男子、かうした女子は、その住む全土を神の恵の下に置く。

— ラスキン —

子供の心

天野誠齋

子供と物真似

□子供は變化を喜ぶ

家庭におきましても、學校におきましても、子供を教育するには、その子供といふものは、どんなものであるか云ふことを、よく知らなければなりません。丁度木工をする者は、木材の性質をよく知らなければならず、金工をするものは、金属の性質を十分に研究して居らなければならぬご同様で御座います。

一體子供の心といふものは、大人の心とは凡ての點において、餘程相違して居るところが御座います。一般から申しますと、子供の心是非常に變化を貴び、また俗に眞似事と申す模倣心に富んで居ります。此の模倣といふ事が、子

供の時代の凡ての生活に現はれ、四歳——五歳から、七、八歳までの子供といふものは、萬事が此の模倣をもつて満たされて居りまして、模倣の全盛時代でござります。

此頃の子供のする事、なす事をごらんになりますと、直ぐ氣附く事で、子供の遊戲は、家庭や社會の出來事で持つきつて居ります。

よく市中で六、七歳位の子供の軍隊を見る事が御座いますが、その規律の正しく上官の命に服すこと。兵營生活の軍隊も及ばぬかごも見られる程で、そのしほらしさに足を止めざるを得ないことは、多くのお方の御承知を存じます。

たゞに兵隊さんの眞似ばかりでは御座いません、活動寫眞を見れば、その眞似をなし。芝居に行つて來ては、その眞似、相撲を見れば、座敷でもなんでも遠慮はない、友達

が疊を持てば疊、扇を持てば扇が欲しくなるといふやうな工合で、萬事が人真似ばかりでござります。

□模倣の材料

子供は生れるときから、親兄弟の間で育つので御座いましたから、最も多く子供に模倣の材料を與へるところの者は家族であると思ひます。

内から外へ出るやうになつて、初めて外部のものを眞似るやうになるので、外に出る様になつても、一日の半は家庭で過すので御座いますから、子供が親兄弟に似るといふ事は、遺傳にもよるゝ事ですが、常に親しく其の言行を見習つて居るといふ事も、その原因の一つであるといふ事を、

學者間にも申されて居ります、これは明に子供の模倣性があるといふ事を示したものと思ひます。

□面白い實例

此處に面白い例が御座います。

或る豪家に五歳ばかりになる、男の子が御座いました、

その子は近所に住んで居つた、若い教師のもとに遊びに行くのを、何よりの楽しみとして居ました。
教師の方でも其の子供を可愛がつて居ました。
或時家の臺所に這入つて、何時もしたゞいのない掠食ひをしたので、さうしてそんな不行儀をするかといはれましたさきに。
『お隣りの先生がやつたから』
こ答へて、別に悪いことをしたゞい云ふ様子も御座いませんでした。
また、その子は新聞を持てば、必ず仰向いて寝る癖がありましたが、これも先生がするから、するのだといつて居つたといふ事が御座います。
が子供といふものは、こんな些細な事までも、よく人真似をするもので、殊に自分の親しくする人程、多く眞似るので御座います。
これが子供の眞の性質であり、子供の心があるので御座いますから、抑へやうとしたゞても出来ることでは御座いません。

此の頃の子供の心さいふものは、張り詰めたゴム紐のやうなもので、外部からの刺戟に對して、強い反應力をもつて居るのですから、外部から受入れたさういふ刺戟といふものは、これを動作に現はさずには居られないでの御座います。

□模倣は子供の生命

一體模倣といふことは、心の固まらない證據で、一定の主義方針がないからで御座います。成長するに従つて、次第に其の強さを減じて参ります。

然しながら大人になつたからとて、全然消えて仕舞うのではありません。

佛蘭西の社會學者タールド氏は

『社會の現象は、凡て模倣が基礎である』

といはれましたが、一面から見ますと、爾うも思はれる程

大人にも此の模倣的精神といふものは、存在して居ます、そしてまた夫れが甚だ必要なる精神であるので御座います。

殊に子供といふものは、此の模倣によつて、心も身體も發達して行くのであります。

處が親達が子供といふものを、よく知らないと

『此の子は人真似ばかりして居る』

とか、又は

『此の子は悪戯ばかりして居る』

とかいふやうに、子供ばかりを責めて、社會の罪、自己の責任などには考への及ばない事が御座います。眞似るといふ事は、子供には止める事が出来ないので、模倣といふことは、子供の生命なので御座います。

そこで親などは——教師は——常に子供の境遇といふものを見良にし、善良なる模範によつて、子供を教育するのを善良にし、善良なる模範によつて、子供を教育するの覺悟がなくてはなりません。

特に此事は家庭教育において必要な事と思ひます。

『其の母を見て、その子を察せよ』

といふ事も昔からよくいふて居ります。

また彼の孟母が我子の爲めに、三度其の居を遷したといふ事も、何人も知る名高い話であります、何れも子供の

教育上、境遇の大切な事・模倣の善良でなければならぬ事を物語るものであると思はれます。夫れ故に、どこ迄も子供の心といふものを知りぬいて、子供の将来のため、教育の道を進めなければならぬと考へます。

眞似事から大怪我をした實例

茲に子供の模倣性——眞似事——から遂に大怪我をした實話があります。

六歳になる子供ですが、或る日親がその子供を連れて、軽業かるわを見せに往きました、子供は珍らしい不思議な藝をいろいろと行りますので、非常に喜んで見て居ました。

翌日になると其の子供は、近所に居るお友達を連れて来て、二階へ昇り窓の欄干の處で、昨日見て來た、軽業の眞似を頻りにやつて居ます。

『面白いだらう、昨日斯んな事を行つたんだよ、いよかへ』又欄干へつかまつては、クルリと引繩返つて、軽業の眞似をしては、お友達と仲好く遊んで居ます。

實際二階の窓の欄干を握つて、軽業の眞似をするなさゝいふのは、何んといふ危険なことでしやう、失れを無心の子供は、危険も何も知りませんから、至つて平氣で夫れを行つて遊んで居ました。

するこ果して手を外して、窓から往来へ落ちました、二階の子供等は呆氣にとられて、下を見て居ましたが、親達は今往来へ何か二階から落ちた物音に驚いて『何が落ちたんだらう……何うしたんだらう』

と出て見ると、思ひ懸けない我が愛兒が、殆んじ氣絶せんばかりに悶え苦しんで居ました、親達に愕然として、素足で戸外へ飛出し、子供を抱起して見ると、まだ絆切れた譯でもありませんので、直ぐに醫師の許へかけつけました。

幸に醫師も在院でしたから、直ちに診療するも、左程の負傷ではありません、只一時の驚きで、氣絶せんとしたのであります。

よつて安靜に寝せて、種々手當を加えますと、大分元氣が出ましたが、親達も何うして二階から落ちたのか、誤つて手でも打つて落ちたのだらうと思つて、跡で様子を訊し

て見ると全く前日見せた輕業が面白かつたので夫れを一階の欄干で眞似——模倣——をしたのであります、そして手を外して往來へ落ちたと云ふ事實か判つたさうです。

此の子供の如きは、實に不幸中の幸福で、撲ちまゝころでも悪かつたら、遂にその儘になつて仕舞つたかも知れません、是等は子供の權威性から生れた悲劇ですが、無邪氣な子供には往々斯んな實例があります。

誤り易い家庭のおしへ

□干渉し過ぎる事

世の親が、子供を教育して行く上に、誤つた仕方が大別して二つあるやうに思はれます。

其の一は干渉し過ぎる躊躇方で、比較的教育ある親に多く見るところであります。

そんな躊躇方をするかと言ひますと、殆んど朝から晩まで、細かい注意や訓誡の言ひづくめで、子供は一刻も自由な天地を見出すことが出来ません。

少しでも夫れに迷ふ様な事でもありますと、夫れから夫れへと小言の連發で、其の口喧しい事誠に驚くの外あります。

けれども果して子供は、此様に煩はしい注意や、訓誡を一々その通り守ることが出来るでありますか。

「過ぎたるは尙及ばざるが如し」

とか言ひますが、其の結果は或は之れに類するものが、あらうかと存じます、如何に多くの注意や訓誡を與へましたからといって、夫れだけ優つた品性の子供になるとは決して申されぬのであります、要は夫れを守ると、守らぬとによつて、子供の品性は決定されて行くものですから單に口噴しく干渉致しましたからと云つて、夫れで理想的の躊躇出来るものではありません。

どんな良薬でも毎日用ひて居りますと、遂には其の効目が無くなるもので御座いますが、是れと同じ道理で、注意や訓誡を始終聞き慣れますと、次第にその權威が無くなり従つて其の効力を失ふ様になるのであります。

多くの子供のなかには、親の小言は申すに及ばず、教師

の叱責さへも何んとも感じないかと思はれるものも御座いますが、此の種の子供は、多く斯様な教育を受けた結果ではなからうか存じます。

また彼の盆栽の植物は、枝振りや恰好など、誠に美しく出来て居ります。けれども、どうも生々した元氣に乏しいもので御座いますが、是れも人が多く手入れをする結果で、やはり子供で餘りに干渉します、或は萎縮したり、卑屈になつたりするやうなこも御座います。

エミールに

「人は神によつて造られた時は、善であるけれども、人の手に入つて破壊される」
といつて御座いますのも、確に一面の眞理をもつて居る事と思ひます。

□可愛がり過ぎる

其の二は可愛がり過ぎる教育で、是れは多くの親の陥り易い事であります。

その駢け方を見ますと、餘りに子供大事に、何んでも子

供の要求しさへあれば、事の善し悪しにかゝらず、一も二もなく満足させ、その機嫌をとる爲めには、どんな高價な玩具でも直ぐに買つて與へ、又どんな骨の折れる事でも少しも厭はず、全く子供の奴隸かと思ふ程であります。

寒い時には風邪をひくからといつて、運動の出来ない程に重ね着をさせますし、又暑い時には病氣になるからといって、日蔭にばかり遊ばせて置くといふやうに、餘りに軟弱な甘やかした教育の仕方であります。

親として子供を愛せぬものは御座いませんが、果して是

れが眞に子供を愛するものゝ執るべき途でありますか。
此の様な教育によつて成長しました子供は、遂に氣隨氣儘のものとなるばかりでなく、身體も薄弱になり、従つて僅の事にも直ちに病ひに罹るといふやうな、誠に憐むべき境遇にならざるを得ないのであります。

□放任教育

其の三は放任教育であります。

如何なる親も、子供を絶対に放任して置く云ふことは

御座いません。

けれども其の教育に餘り意を用ひないと云ふものは、往々見受けられる事であります。總て子供は、種々の質問を發するもので御座いますが、無關心な父母は、仕事に忙がしい爲め、折角の質問も少しも取合はず、また悪い事をしても、子供のすることは、仕方がないといつて頗みず、全く子供の爲す儘に放任して置く向きも御座います、然しながら子供は斯様に放任して置きましても、立派に成長するものであります。

勿論子供には、將來大に發展すべき天賦の能力が御座いますが、此の能力も其の儘に打ち捨てゝ置きましたなら、決して發達するものではありません、子供が人としての發達を遂げることの出來ますのは、全く教育の力によるさいはなければなりません。

わ れ ら、老 ゆ る な け ん

茲に教育といひましても、單に學校教育ばかりを意味するものではありません、その大半は家庭教育の資といはなければならぬのであります。

所が往々此の重大なる家庭の教育を等閑に附し、兒童の

將來を誤るものゝありますことは誠に慨嘆に堪えぬ次第であります。

以上挙げました三つは、何れも家庭教育の誤りであります。其の何れにも陥らず、最も適當な教育を施すと云ふことは、また至難の事で御座います、而して眞に子供を愛するものは親であり、眞に子供を知るものも親でありますから、一度思ひを茲に致しましたら、必ずや其の間各自最善の教育法を發見することが出来やうと思ひます。

O·W·HOLMES

子供の夏の旅行に際して

小兒科竹内病院長醫學士 竹 内 薫 兵

親に伴はれて避暑に赴く子供は外觀上實に幸福なものであるが、一方にはこれほど危険はないのである。何となれば近頃の避暑地といへば大抵都會人の集合地となつて居るから、放埒な避暑地氣分は飲食物の土にも現はれて、無攝生に飲んだり食べたりする。親なり周圍の者なりが飲食物に對する攝生を守らない如く自分の愛兒にもつゝ自分達の飲食物を與へる傾向がある。そのために小兒の胃腸の病氣はどうしても避暑地に於ては起こり易いと思はなければならぬ。これが危険の第一である。

又かくの如き土地であるから一旦傳染病でも發生すると其豫防機關のない爲めに速に周圍へ蔓延する。自宅では健全で丸々と太つて居た子供が、更に丈夫になるためにわざく行つた避暑地先きで、運悪く傳染病に罹つたとした

らこれほど哀れむべき事はない。これが危険の第二である。それから傳染病ならずとも小兒には恐ろしい病氣がいくらもある。避暑地先きで病氣が發して忽ち命を取られたりする子供がある。而かも決して少くないがそれは必しも傳染病ではないのである。さてそんな恐るべき病氣が發生した場合に避暑地の多くは醫治が迅速に的確に届く場所がないのであります。急に子供が發病した。サア醫師は二三哩先きでなければならない。それもいつ來てくれるか判らない。と云つて賣藥は寶丹か風邪藥しかないとふ様な土地は珍らしくない。わざく東京なり。其他的都會なりから醫師の來診を求めて、其醫師の到着する頃は落命するなどといふ悲慘事が少くないのである。これが危険の第三である。しかし避暑に行くのは危険ばかりかといふに決して然ら

す。他に真似の出来ない長所があるから、われく始め大賛成でお奨めしては居るが一面には危険のある事を注意しなくてはならぬ。そこで私は子供の病氣に關して夏心得べき二三を述べて親御達の御注意を促したいと思ふ。必しも避暑地に赴く親のみではない、一般に夏の旅行には小兒に對して注意して欲しい事柄である。

第一に藥を持参して出掛けける親があるが、これは愚の至りである。殊に子供のために熱の出た時の用心にといふので熱さましの藥。腹の下痢する時の用心にといふので下痢止めの藥、此の二つは誰しも持參して出掛けたがるが、私は賛成しかねる。それから消化の良くなる藥、胃腸を丈夫にする藥、水にあたらぬ藥などと、註文は數に出る。しかしづれも賛成し難いのである。子供の病氣は、すべて熱が出たから熱さましを飲ませるとか、腹が下るソレ下痢止めの藥といふ具合に飲ませて治すべきものではないのである。

第二は乳飲み児即ち哺乳児の下痢である。母親の乳を飲んでての下痢はさみ驚くには當らないが、若し人乳以外のものを飲んで、下痢して來たら急いで醫治を受けねばならぬ、しかもその大便が水様便であつたら成るべく早く歸宅した方がよいのである。これが進むと食餌性中毒症といふて殆ど全快しない病氣となつて終ふからである。此病氣にもいきなり下痢止め藥など飲ましてはいけません。

第三にはよく子供のやる大腸加答兒といふ病氣で、下痢すと同様で、而かも其刀の刃は自分の方を向いてるか人の

が突然と起こり而かも一日に十回二十回と隨分と多い數の便通がある病氣ですが、子供の年齢が多い程治りはよいものですから、一概にあはてるには及ばないが、若し旅行先きが自宅へ近かつたら歸宅した方がよい。これから隨分と重症に陥る事があるからである。

第四には痩痺といふ病である。この病氣は隨分恐ろしい病氣であるだけ、今日では遍く人口に喰炎して居るがしかし相不變恐るべき病で、一夜にして愛兒を失ふ事は珍らしくないものである。どんな痩痺でも熱の出ない事はない、身體がぐつたりして勢が無くなり、大抵は突然痙攣や嘔吐を起こすのです。下痢はひどく頻繁の事はむしろ稀で、數回出るに過ぎない。出た便は青黒い粘液便で、一見尋常の便でない事が知られる。痙攣の早く治るのはよい印だが、いつまでも(數時間も十時間も)気がつかないで、居るのは助からない事が多い。即ち悪徴である。こんな容體が一つでもあつたら母親始め周圍の者はヒマシ油を子供に與へるがよい。砂糖水の上へ浮かして、四五箇の子供ならヒマシ油を十二三乃至十五グラム位飲ましてよい。しかも四時間

位の後は又もう一度此分量のヒマシ油を飲ませ、頭へ氷枕をあてゝ成るべく早く醫師を迎へねばならぬものである。心得のある母親ならば腸を洗滌するがよい。しかし中々困難ならば早く醫治を乞ふ事にする外はない。しかし痙攣は一回だけで其儘落命するものではないから、痙攣だけで驚く事は要らない。四五歳のところは實に危険な病氣である。

第五には赤痢である。これも更によく子供のやる病氣です。高熱が出て来て、便が二十回も三十回もやる、即ちひどく下痢するのが特長である。この病氣に罹つたら食物を必ず制限しなければならぬ。おもゆなどはよく用ゐる。かつぶしスープもよろしい。腹巻きを行つて腹部を温めるようよい。安靜が第一だから危険は少い。しかし法定傳染病であるから警察署へ届出る義務が、治療した醫師にはあるのである。

第六には湯治場又は海水浴場へ赴く小兒が入浴したり、海水浴をしたがる事である。それはなるべく控へたがよい。よし入るにしても一日一回十分間を超えるのはよろしくないのである。(丁)

途上劇 子供好き

K M 作

場所 省線電車内——(御茶水驛)

時 初夏の夕刻

人物 一、若い会社員A

二、その朋友B

三、三十歳前後の丸髪の女

四、その女の子供——(二歳許の愛らしい男の兒)

電車は丁度会社のひける時刻なので、どれもこれも満員。

若い会社員のAとBとは、混み合ふ電車の中で、二歳許の愛らしい男の兒を抱いた丸髪の女の前に餘地を見出

して、吊革にぶら下る

電車は動き出す。

警笛がブー……ブーと長く二度響く。

窓から舞ひ込む軟い風が乗客の頬を心地よく撫でる。

子供は風に翻る土産の桃色の旗を喜ぶ。

Aは子供の無邪氣な喜びをながめてにつりする。ちらと友の顔を見る。

A「ねえ君、おれはどういふもんか、ばかに子供がすきでね——そのせいいか子供も——大がいの子供は、おれにはすぐなついて仕舞ふから妙だよ……矢張りどつかしら、子供にすかれるところがあると見えて、これでねえ……」

B「…………」

A「可愛いゝ兒ぢやないか」

丸髪は子供を褒められてにつとする。

A「坊ちやん、いゝ兒ですね——そら、をぢさんをじらん、べろんく〜」

Aは夢中になつて、口唇に人差指をあて擦いて、しきりに妙な顔をする。

子供は何と思つたか、急に口がへの字なりに曲つて、「ワアツ」と泣き出す。

B「なる程ねえ」獨言。

——幕——

雨のふるあさ。

子どもにさせる塗り繪と貼り繪

『居ましたか』と、聲をかけると、鬼の首でもこつた様な顔つきで

廣いお部屋に集つた私の組の人たちで遊戯を始めやうとして、人々の顔を見まはすと、ついさつき、元氣に挨拶したばかりの弘ちゃんが新ちゃんとの顔が見えない。

『これで?』

羨しそうに、みなが訊く。

私は、その日の切紙を「かたつむり」にしました。

▲ かたつむり

『えゝ、今ね、マントに帽子をもつて裏のストーブ小屋へ、かたつむりごりご……』

柳はみどりに、幹は茶色。お家は赤い屋根に青い壁、つばめは黒い紙のきりぬきで貼らせる。

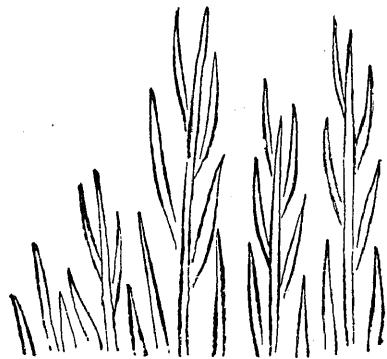
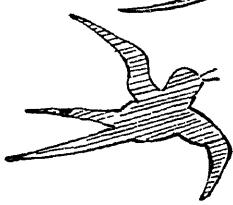
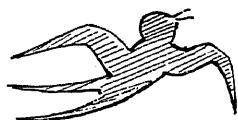
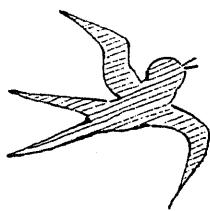
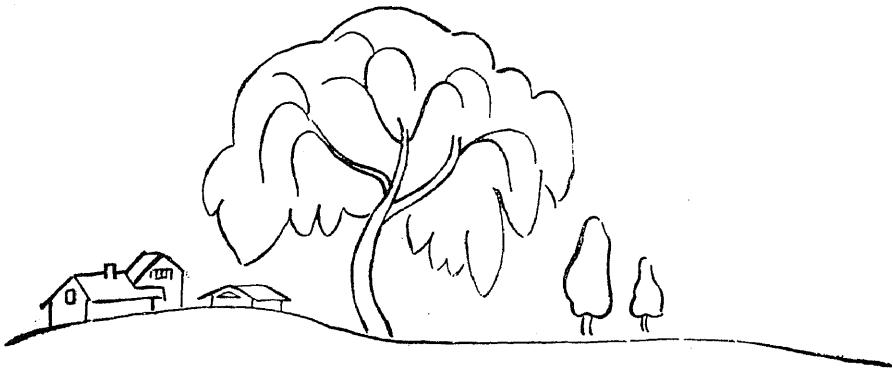
川 及 み ふ

子どもにさせる塗り繪と貼り繪

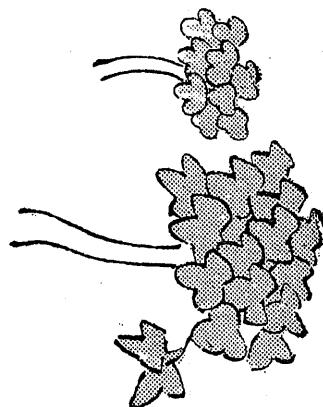
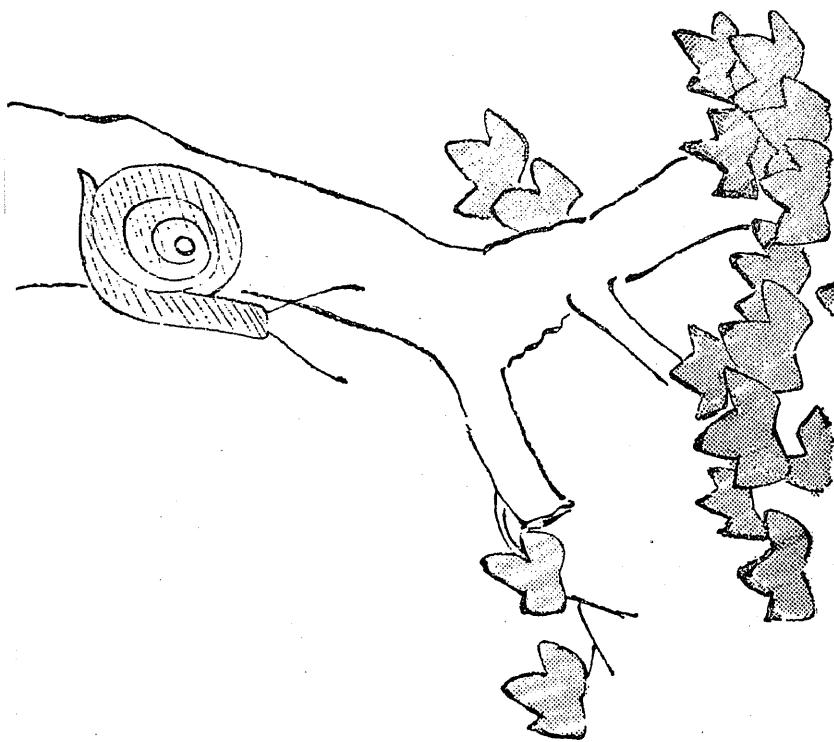
『そう』とひつたまゝ、急いで裏へ行つて見た。

するこ、長靴の足もこ危く、石段にかけのほつて、獲物をねらつて手を伸して居るところであつた。

大きな青桐の葉は緑に、幹は緑をつくすくねる。小さい一本の木は葉も幹もうす緑にねる。かたつむりは茶色の紙にかいて、それをきりぬかせて貼らせる。



東西洋の子守唄（上）



童話 小さい音楽家

山崎みつ子

今から百年ばかり前に、オーストリアにフランツといふ男の子がいました。フランツはまだほんの子供でしたが、音楽が大層好きでした。そしてお父さんにせがんでピアノを買つていたとあります。

そのピアノは悪い悪いピアノでした。何故ならフランツのお父さんは貧しい學校の先生で、樂器などに澤山のお錢を出すことはとても出來なかつたからです。

しかしフランツは不思議な子供でした。フランツの小さい指がすばしく動き出で、悪い悪いピアノから、いつでもうつざりするやうない音が出るのでした。

或る日お隣りのヨセフ叔父さんがフランツの家に遊びに来て、フランツを大きな樂器店に連れて行かうと云ひました。そしてその店には大層立派なピアノが幾臺も幾臺もあ

る話しました。だからフランツはその晩はさうしても眠れませんでした。

夜が明けると、フランツのお母さんは、二階に寝てゐたフランツに下から聲をかけました。

『フランツや、起きてるかい』

『えゝ、起きてますよ。そしてもう着物もちやんと着てるます』

フランツは元氣よくかう答えてとんくと降りて來ました。お母さんは思はずにこりこ笑ひました。

朝飯もそこそこにすまして、フランツはヨセフ叔父さんと一緒に出かけました。樂器屋までは大分路のりがありました。そして幾度なく立派な馬車が一人の肩に砂ぼこりを浴せながら、威勢よく通り過ぎます、しかしフランツは

たゞもうピアノのここばかり思つてぎんさん路を急ぎました。ヨセフ叔父さんは背が低くて、肥つてゐましたので、

『顔を真赤にして、息せきましてついて行きました』

やがて樂器店につきました。フランスはすぐに立派な一

臺のピアノの前に腰をおろして、それを弾き始めました。

この世の中には音樂ほど面白いものはないと言ふやうに、フランスの顔はうれしさに頭髪の根元までほつと紅くなつてゐました。

その時一人の紳士が店にはいつて來ました。そしてフランス

が彈くピアノの音にちつと耳をすましてゐましたが、やがてヨセフ叔父さんの傍に行つて、いろいろフランスのことを尋ねました。フランスは誰にもピアノを教はつたことがないこ、ヨセフ叔父さんが言ひますご、紳士は考深さうに、

『どうですか。誰も教へないのでですか』

と云ひました。

『え、さうでござんすとも、何しろ親父さんが何か新らしいものを教へようとするご、その時には彼の譜はもう

ちゃんとそれを知りぬいてるやすからな。』

『ヨセフ叔父さんは自慢さうに云ひました。

紳士は小さい息をつきながら、獨言ひやうに、

『確かに驚くべき子供だ』

『呟きました。それからヨセフ叔父さんの方を向いて、

『もうかあの子のお父さんに、明日の朝あの子をつれて私の家まで來るやうに云つて下さい。私は帝室合唱團長です。』

『云ひました。そしてその儘店を出ました。

ヨセフ叔父さんはあきれたやうな顔をしてその後姿を見つめてゐました。

フランスは一生懸命にピアノを弾いてゐましたので、二人がざんないとを話し合つたが少しも知りませんでした。

歸り途でヨセフ叔父さんが今迄のこと話を話しますご、フランスは可愛い目をまんまるくしました。しかし何のために帝室合唱團長のうちによばれるのがわかりませんでし

た。

翌日フランスはお父さんにつけられて、帝室合唱團長の

家に行きました。園長はフランスをピアノの前に坐らせていろいろな曲を弾かせました。そして一つの曲がおしまひになる度に、小さい溜息をつきました。やがて園長は、フランスのお父さんに

象の涙

—上野動物園にて—蚊痛ニ

『フランスさんは、あとできっと世界一の音樂家になります。どうでせう、私の家にフランスさんをお預りして、

音樂學校に通はせては?』

と云ひました。お父さんは驚いたやうな、嬉しいやうな顔をして、暫らく黙つてゐましたが、やがて。

『あなたさへおよろしければ、私には異存はございませんでした。』

みなさん、これが世界で名高い、オーストリアの音樂家

フランス・シユーベルトの子供の時のお話です。

象が嘆いていふことにや
花咲く國さあこがれて
来たのを乃公はうらみます
今ちや足枷三十年
どこに咲きます心の花。
象が嘆いていふことにや
情の果のなる國さき
慕ひ來たのがあだとなり
戻痴の泪に故郷の
舊友の片影がうつります。

象が嘆いていふことにや
はやせいばれたこの老齡ちや
暴れも逃げもないません
歩んでみたい二歩三歩
けふもなみだの日がくれる。

大きなお日様

作詞
茂木由子
作曲
萩原英一

$\text{d}=112$

おほきな おひーさき まつかい な
ふやまの うへで まつかい な
からすが かあかあ ないてき た
たれかが どほくで うたつて る
あしたも てんきに なあれ

童謡 大きなお日様

大きなお日様
お山の上で
からすがかあく
かれかど遠くで
鳴いて來た
唱つてゐ
あしたも天氣に
なあられ

童謡 大きなお日様

茂木由子作

律動表情 遊 戲

振附 土川五郎

◇ 大きなお日様

注意

「かけくら」の樂譜は本誌の前月號に載つてゐます
から御入用の方は發行所へ申込んで下さい。本誌
は土川先生に御願ひして毎月この律動遊戲をのせ
る事にいたしました。(記者)

(一)

おほきなお日様

斜左向をなし、兩手を兩側
より頭上にあげ圓をつくり
左上を眺む。

第一圖





第 二 圖

(II)

まつかいな 挑手足踏三回、
おやまの上で 斜右向をなし、最初の表現を同
じくす。
まつかいな 前に同じ。



第 三 圖

(III)

鳥がカアカア鳴いてきた

右向両手を左右に開き
羽ばたきをなし、行
進。

(五)

うたつてる 體を起し上に伸し、左足一步前に、右踵をあげ、右食指にて前方を指し、顔は右方より後、やゝ下を振り返つて、

人に知らせる如くす。



第四圖

(四)

たれかが

左向(内方に)、左足を一步内に踏み出し

上體を前に傾け、左肩を前に下げ、胸と顔を右に向け、左手脇を曲げ、手を左耳の後にし、聲を聞く如き状をなす。

とほくて

右足一步前、右手を耳の後に前の如くす。



第五圖

(六)

あしたゆてんきに

一同手を繋ぎ左上を見

て左行す。

なーあーれ。

拍手二回、内方に向ひ

両手を上げ。



第六圖

◇かけくら

準備

一同内方に圓形をつくる。

一、II、III 足踏をなし、三回拍手す。

第一節

左手を上げ左足にて跳ぶ、此時右足を上げ左足を見る。

第二節 右方に左手を上げ、右足にて跳ぶ。前と反対に同じことをなす。

第三、四節 前と同じことを繰り返す。

第五、六、七、八節

上體を稍前屈し、両手を軽く握り脇を曲げ
両脇を前後に動かし、調子をさりつゝ軽快
なる駆足にて右廻轉して圓心に向ふ。

間奏

第一節



第一圖

(1)

あかかつ 右方次に左方に振る。
やうに 右方次に左方に振る。

三



第二圖

(1)
しろ
兩手を體前に出し、旗を持てる如くして之
を右へ振る。
かつ 左方に振る。
やうに 前と同じく更に右及左に振る。
やうに 前と同じく更に右及左に振る。

(四) 間奏 前の間奏と同じ表現

しろかつやうに 前に同じ。

あかかつやうに 前に同じ。

お旗のとこまで

はあやくはやく

左向駄足。(四歩)

兩手を右より左へ前の早くの時
と同じく振る。

先生のとこまで

はあやく早く。

更に右向かけめし。



第三圖

(三) はあやく

兩手を左側下方(掌を上に)伸ばし「はあ」

右方へ強く振る「やく」にて左方へ戻す、

即ち兩踵を交互に上げつゝ、上體を手さ

同じ方向に動搖せしめつゝ、兩手を強く體

前下方を通じて左側方に振り軽く右方に

返す。

前に同じ。



第四圖

児童彫塑展覽會を看て

倉 橋 生

彫塑藝術の諸大家が、小學兒童の粘土製作を集めて、日本美術協會で展覽會を開くといふ話は、私にとつて、近來の快心事であつた。

私は豫て、兒童の彫塑製作に就て、深い興味と尊重とをもつて居る一人であつた。しかも、現在の所謂手工科の「粘土細工」といふものには、頗るあきらまない感じをもつて居た。而して、これを數ぶて正しい位置におくためには、藝術家の力によらなければならぬといふ確信をもつて居た。今度の曠原社諸君の計畫が、私をよろこばせた理由は、多くの説明を要しない。

×

北村西望氏や、建畠大夢氏や、朝蔭其明氏やその他の諸君が、藝術家として、如何なる作品の集まつて來ることを

期待して居られたかは、敢て想像しても見なかつた。しかし、これ等の諸君の平生用ゐらるゝ粘土と同し粘土が——生命のある藝術として生かさるゝ粘土が、現在の學校の手工室では、如何に小さく、生命のない教育でこね固められて居るかといふことを知つて居る私としては、出品の結果について、ある懸念がない譯にはいかなかつた。そこで展覽會に先だつて、小學校の先生方を招いて開かれた講演會でも、私は、どうぞ、兒童に存分の粘土を與へて、思ひ切つて自由な製作をさせて下さいといふことを勧めた。兒童の粘土製作は、兒童生活獨特の原始藝術的偉大さのあらはるゝところに、其の生命があり價値があるのだといふことも繰りかへし說いた。そして、ほんとうの兒童彫塑で、専門の彫塑藝術家を驚かして下さいと希望しておいた。

x

展覽會には、數百點の作品が陳列せられた。一つ、二つ、三つ、寧な陳列法のしてあつたことも、非常にうれしいことであつた。世間の興味が意外に強くて、入場者の日々多かつたことも愉快であった。新聞紙も其の寫真などを載せたりして、兒童作品の驚くべきことを傳えた。主催者側の諸君も、専門作家の製作とは違つた、ある驚嘆すべき作品の多いことを語つて居られた。私も、幾度びか其の前に立ち止つて心の底から眺め入つた、幾つかの傑作を見出して喜んだ。——しかし、遠慮なくいへば、私の期待して居る兒童の彫塑は、決してあの程度のものではない。出品の中には、可なり小細工のものが多くあつた。生命のない型を眞似て居るものも數くなかった。なかには、低級な粘土玩具の模倣の様なものまであつた。勿論、そういうふものが全部では決して無かつたが、折角く兒童の彫塑を尊重して下さつた藝術家諸君の前に、斯うしたものを見せなければならぬことは、教育者側といふべき私達の可なり心苦しいことであつた。

兒童彫塑展覽會を看て

x

但し、私は決して失望しては居ない。これは、今日の手工教場の「粘土細工」が、そのありのまゝに出品せられたものであつて、「兒童彫塑」の眞を語るものではない。寧ろ、斯ういふ有様であるからこそ、藝術家諸君の助けを俟たなければならぬのであり、其の意味に於て、(曠原社諸君が此の展覽會を開かれた趣旨は、必ずしも、そうではなかつたろうが)此の展覽會の必要もあつたのだと思ふだけである。先生に披はれた圖畫のほかに、眞の「兒童畫」があつたりする様に、眞の兒童彫塑が、眞の兒童彫塑として存在し、また成長する」とに、變らぬ確信と、變らぬ希望とを持ちつゞけて居るのである。現に、今度の出品の中にも、此の確信と希望とを、私に一層力づけて呉れた作品も、決して少くはなかつたのである。

要するに私は、曠原社諸君の此の新らしい計畫に對して深い感謝を表すると共に、これから益々、藝術家諸君の直接の力によつて、「兒童彫塑」を眞實のものにして頂くことを更に深く希むものである。

生長する環境

橋

爪

健

一つの花片がほかの花片に

陽のめぐりやうで影をおとす

翳つた葩は身をまかせるやうに

嬉しみ息づき薰りつゝ憩む

風に搖られて一つの葉が

そばの群葉に舞ひこむとき

その葉は凝視の網に絡まりつゝも

仲間の睦しさに怡々と抱きこられる

未成の私を圍む世界は大きいやうだが
内なる眼にはまだまだ小さく見え
唯自分の姿ばかりが亘きく見え
葩の影も葉の搖籃もないけれど

あゝ今はもう私の小さい環りにも

仙女の囲に似た聲がきこえ

鳳仙花の顎のはじけるほどの

影と匂ひの親らの世界が展けてきた

おゝ鶴よ鳩雀よ、小鳥は歌へ

樹合歡、アジアンタム、樹草は伸びよ

おまへらの響が影がとどいてきたら

私もだんだん伸びて行かう歌へもしょう。

おもちゃ箱から——家庭製作——

東京女師高等師範學校講師 藤 五代策

一 歩く鶴鳥

成るべく厚いボール紙の上に、第一圖の鶴鳥の形をゑがいて（脚は附けない）、鉄又は切出し小刀で切り貰きます。

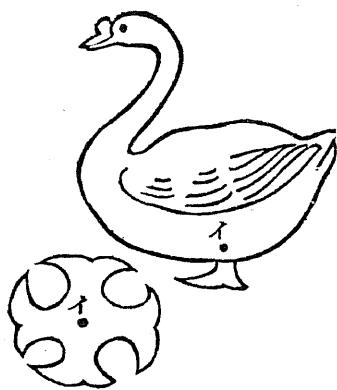
次に脚部を

作るにはボーラー紙の上に一個の圓をゑがいて、其の内

に下圖に示す

やうな車形の脚を圖取りし

て切り貰くの



第一圖

です。

これから車形の脚の中心點(イ)を鶴鳥の下腹部の(ア)の面に重ねて錐孔を通し、之れに紙の小擦ハサフを刺して表面に裏面を結び、コブシで止めるのです。

今この鶴鳥の尾端を持ち、脚を座上に附けて前方に押します。車形の脚はクルリと廻つて、次ぎくと現れるので、眞に歩いてゐるやうに見えます。鶴鳥が出来ましたら、同一方法で、あひる、雞などを作つてござんなさい。

二 水面に浮く蛙

一つの卵をこり、一側面(イ)部に孔を穿けて、中の身を吸ひこり、之れから少し許りの砂を入れます（砂の量は卵のからが半水面に浮く位に入れるのです。）

次に畫用紙の上に(ロ)の如き蛙の形を描いて鉛で切り貫き、初め作つた卵の殻の上に糊ではりつけます。

是れからロ

ウソクの燃え屑を茶碗に入

れ火で温める
こだんく焙

けてミロく

になりますか

ら、その液を
筆につけて、

蛙の上面や下
面全體にぬる
のです。

今此の蛙を水鉢や庭のお池に浮べますと、眞の蛙が泳いでゐるやうに見えます。

同一の仕方で龜の子や金魚なぎを作つたら、一層面白いいふのでしやう。

おもちゃ箱から

三 舟に子供

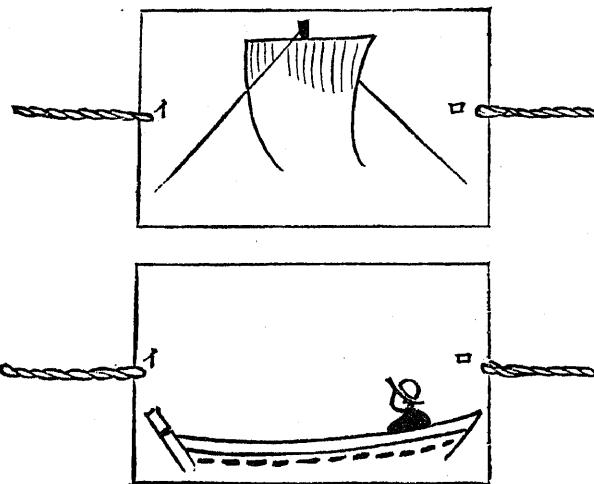
ボール紙から長さ四寸、幅一寸五分位の長方形を切り取り(表裏面とも白紙にて貼ります)。表面の方には上圖の如



第 二

圖

第



圖

き舟の帆と帆綱ごをかき、裏面には下圖のやうな舟ご子供ごを描きます。最後にボール紙の左ミ右の端に(イ)(ロ)の紐をつけます。

今此の紐を左右の手に摘みながらクル／＼こ廻はせば、表面の帆と裏面の舟とが一しょに見えて、恰度帆を揚げた舟に子供が乗つてゐるやうに見えます。

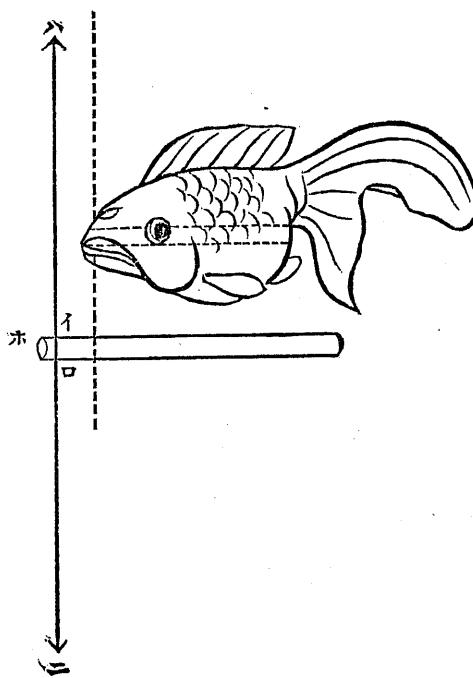
凡て吾々の眼には、一物體を見た後に其の物體が去つても、暫時はその形を殘存してゐるものです。斯様な道理からして、此の玩具にても先づ表面の帆を見るや否や、其のものは去つて裏面の舟ご子供が現れて、交互に表裏の繪が隱現するから、

一つの圖形ごして認められるのです。活動寫眞の活動する原理もこの殘像の道理を應用したもののです。

四 アル／＼降る金魚

直徑三分、長さ一寸位の管竹を二つて、左端(イ)(ロ)にかさい雑孔を穿けて、之れに長さ一尺許りの極細い針金を

第四圖



通します。

次に畫用紙を二つに折つて、其の一面に第四圖の金魚の形を描いて切り貰き、初めに作つた管竹を中に挿んで、兩面から金魚の形を貼り合はせます。(つゞく)

鳴く蟲の話

東京女子高等師範學校助教授 平 島 権 藏

涼しさうな、數寄屋が紗の様な薄衣を着けた鳴く蟲の、打振る羽衣の衣擦れによつて起る、金鈴銀鈴の床しい調べの音色には、思はず逍遙者の歩みを止めさせるのである。是は我邦人の愛好する景物の一つであつて、千數百年の昔から、日本美術の思想と共に、文學の生命となつたのである。實に日本文學、殊に其詩歌は『鳴く蟲』によつて成り立つたと言ふても過言ではあるまい。日本人は『鳴く蟲』

聲を聞く時は一層幽邃の情趣を覺えるものである。蟬の聲も噪がしい事は噪がしいが『春蟬』が五月頃に松樹の間に、ジージーと鳴く聲や、炎天の日影も稍々傾いて、夕風の吹き渡る柳に『ヒグラシ』のカンナ カンナ カンナと鳴き立つ時は又捨て難い趣が無いでもない。特に子供に蟬や蜻蛉はつきものである。

然しながら何と言ても、聲を聞いて樂しむのは『籠の蟲』によつて、吾々の想像し得ない美的生涯を送りつゝあるのである。然し同じく鳴く蟲と言つても、蟬の聲は昔から蛙聲蟬噪など言て噪がしいものとして厭はれて居るが、然しづの類でも『カジカ』なさは人に愛玩され、其聲は實に静かなよい響を持つて居る。が是は元來山間の溪流に棲むもので、こんもりご樹木の生ひかぶさつた溪河の流れに靜な此

とある。蟲の音が審美上の快感として詩家文人に讃美せ

「貞享四年六月十三日の夜、キリギリス賣る翁訪ねむて
四谷より麹町、本郷、湯島、神田等を限なく歩みて夜を
明したり」

鳴く蟲の話

四

られた事は疑の無い事である。

蟲屋の起源は古い事であろうが、江戸に於ての其起源に就ては、記録を見るご今から、二百五十年前に、越後から出て来て神田邊に一戸を構へ、青物商を營業んだ忠藏といふ者が、商賣の歸途、蟲に名高い根岸の里を過ぎ、ふた數

匹の鈴蟲を捕へ得て持歸り商賣の胡瓜茄子なごを與

へて、飼つて置たが、夜になつて微妙の聲を立てゝしきり

に鳴く、家人は思はぬ音色に惹かされ、一同集つて餘念な

く傾聽する中、其音色いつしか四隣に聞えて、誘はれ来る

もの次第に多く、店頭いつしか市をなし、其次の夜も次の

夜も夜毎に聞手が加はつて店頭の床几も處せまき迄に賑は

つた。忠藏は是に力を得て、集めては飼い、飼つては育て

遂に本業を打して、『蟲屋の忠藏』と誰知らぬ者も無い『蟲屋』となつた。其後には利益の多い商賣だといふ事が諸

方に傳つて蟲屋の數も年々共に加はつたといふ事である。

然し前にも述べた、カジカの聲を聞くのが山間の溪流に於て善い様に蟲の音も、自然の儘の野邊の千草の露深き中こそ、實に言得られぬ妙趣の在るものである。私なども毎

年一二度は、井の頭公園の夜を蟲間に行く。九月中旬にはクツワムシ、スズムシ、マツムシなどがしきりに鳴き立つる。月の夜などは何とも言へぬ趣がある。

古來蟲の名所として文献に見えて居るのは

松蟲

攝津の住吉

陸奥の宮城野

山城の神樂

岡山城の小倉山

鈴蟲

伊勢の鈴鹿山

尾張の鳴海

山城の嵯峨野

山城の竹田の里

近江の小野の篠原

都人士は思ひくに其地を訪ねて月下に嘵鳴たる自然の音楽を傾聽した事であろうが、星移り物變り今は銀座街頭

車馬雜鬧の邊りに、蟲屋の籠の中から或は又座ながらにして蟲籠の中から、其聲を聞取れるのであるが、少しく足を

運んで、月下の井の頭公園などに『蟲聞き』するのも又忙中の閑ではありますまい。

昆蟲の音を出す方法には幾通りもあつて打撃に依る打撃音、爆發に依る爆發音などもあるが、美しい音色を出すのは摩擦振動に依る音である。其中でも翅と翅とを擦り合す音に美音が多い。キリギリス、クツワムシ、ウマオヒムシ、コホロギ、スマムシ、マツムシなぎは前翅（即ち覆ひ翅）の

基部に近い所を摩擦して音を發する、其翅の一方には、摩擦片（他方には摩擦脈（又、鱗狀器））とがある。摩擦片といふのは、翅脈の一つが特別の發達をして、硬く壁櫛状になつて居るもので、鱗狀器といふのは翅脈の一つが、發達して其表面即ち摩擦する面に銀貨の縁の様な凸隆部がある。是を兩方摩り合せて出る音が、特異の構造から出来た翅脈又は鎧音鏡に共鳴して、一層高い強い音となる。發音鏡は完全なものあるが、螽斯科のもので鳴く蟲には皆是を認める（キリギリス、ウマオヒ、クツワムシ）、又蟋蟀科のものには、前翅の外縁が體の側部に屈折して居るのこ發音の場所即ち摩擦片から放射状に複雜な翅脈が排列

され、更に是から細い翅脈が出て共鳴する様に出來て居る（コホロギ、スマムシ、マツムシ、カンタン等）。の以上をヴキオリンに比べて考へる（鱗狀器は丁度弓状、然して此絲が馬の尾から出來て顯微鏡的の節のある様に是にも節（銀貨の縁の様な）があり、摩擦片は絲に、而して發音鏡が胸に相當する様に自然の考と人間の考とが一致したのである。

是は飛行機が鳥の真似をしたり、鳥賊軍艦が（歐洲大戰に用ひられた黒煙を吐いて艦體を包み敵に所在を認めさせず、隨て其射撃を免れた）鳥賊の真似をしたり、昆蟲の保護色を真似て軍服をカーキ色にしたのは遠ふ様である。

何故ならば、胡弓や、ヴキオリンは顯微鏡よりは前から出來て居たからである。唯一つ注意すべき事は前翅を摩り合す際に、スマムシの様に右翅を上にするものには右翅の裏面に鱗狀器があり、キリギリス、クツワムシの様に右翅を下にして摩り合す類のものには左翅の裏に鱗狀器のある事である。

然して是等の翅を摩り合す時の其振動數は音色に關係する事勿論で、蜂は毎秒四百四十の翅振動をなし蠅は三百五十二の振動をしてブーンブーンといふ彼の音を發するのであると、吾々の愛玩する種々の鳴く蟲の振動音の翅の振動數を數へるに面白いと思ふが、まだ其機會を得ず居る。さて是等鳴く蟲の音を發するのは何の爲かといふに、其は皆雌雄關係で、雄が美音を發して雌を歎ばせ、是を引きつける爲である。其れ故に蟬でも是等鳴く蟲即ち籠の蟲でも鳴くのは皆雄である。鳴く蟲の雌雄の鑑別は其腹部の體末にある產卵管といふ突起の有無で知れる。是のあるのは雌で無いのは雄である。

又斯様にして飼て置く間に前に述べた雄が雌を歎ばす爲に鳴くといふ事を實驗するに實に可憐なものである。例へば、スズムシ、コホロギの様なものを雌、雄、同じ器に入れて置くと雄がセツセツと雌を探して是に出会ふと初め觸角で觸つて是を知り確めて置いて直ぐ向き直つて雌に後を向け翅を立てゝ得意になつて是を振り立てゝ妙音を出す。此後を向ける事は、翅の下方即ち後方で音を出すのであるから是をよく聞かすには後を向ける方が善いのである。然して折々後肢で雌が居るか否かを確認する爲に觸つて見る。若し觸り得ないで其居ない事が明かると翅を下して更に其行方を探し歩く、實に可憐のものではありませんか。(了)

草の葉に止まつて生活する様なのは籠が適當で、土上に生ずるものには壺か硝子鉢に土を入れて其に小さい草などを植ゑつけ彼の故郷の状態にして置くと喜んで生活しよい音を出すのである。

又斯様にして飼て置く間に前に述べた雄が雌を歎ばす爲に鳴くといふ事を實驗するに實に可憐なものである。例へば、スズムシ、コホロギの様なものを雌、雄、同じ器に入れて置くと雄がセツセツと雌を探して是に出会ふと初め觸角で觸つて是を知り確めて置いて直ぐ向き直つて雌に後を向け翅を立てゝ得意になつて是を振り立てゝ妙音を出す。此後を向ける事は、翅の下方即ち後方で音を出すのであるから是をよく聞かすには後を向ける方が善いのである。然して折々後肢で雌が居るか否かを確認する爲に觸つて見る。若し觸り得ないで其居ない事が明かると翅を下して更に其行方を探し歩く、實に可憐のものではありませんか。(了)

萬國幼稚園協會案 幼稚園要目（續き）

第七章 遊戯とゲーム

特種目的

完全な自己活動の精神で、遊戯やゲームをする、子供は○長して必ず自己及他人の幸福を増進する爲れ自己を犠牲にする事の出来る、完全な自決的人物になる。

遊戯が、教育上からも、又人生からも重大なものであるといふ事は、現代の教育家の多くが一致する處であつて、フレーベル以來その方法の選擇や形式の組織に就いて多く研究がなされて來た。遊戯は又筋肉鍛練や注意力の増進と同様、子供の種々な時期に於ける社會本能を十分満足せしめる。

一般目的

體力増進、身體の鍛練、活動の優美と容易、社會的協力の訓練、經驗を理解する爲の補助。

幼稚園要目（續き）

主題及方法

正しく行はれるゲームは、身體的鍛練と智力の集中、と社會的協力の悦とを含む——程度は一樣ではない。四歳から六歳までの子供に特に價値ある遊戯とゲームは次の如く

音、色、形を識別して一時に一つの感官を働かす遊びに依て、特種な觀察力の鋭敏さを増進すること、筋肉を平均して發達せしむること。——殊に胸の筋肉と、此の時代に急速に發育する腕、足の筋肉に於て——。

リズム的な活動によつて自己表現を助長する事と、之等の活動を美的形式ならしめること。
劇的表現によつて経験を理解する事と組み立てる事を扶助する事。

分類される。

感覚的辨別の効を呼び起す遊戯。

筋肉の活動と鍛練のゲームと遊戯。
リズム的活動と歌に合せたゲーム。

劇的遊戯。

感覚、遊戯。——幼稚園前時代に——

子供達は、身體の基礎的調和の熟達と初等感覺智覺の鍛練に、
多大な關係を持つ。

物は子供達にとって二重の興味を持つ。——身體的反應の中心

としての興味と新しい感じの源としての興味——

之等は、觸覺視覺聽覺筋肉感覺を享樂する爲になせられる。

幼稚園時代には、子供達は日程にある音樂的經驗及多種
の材料で製する事によつて、更に多くの感覺訓練を受ける。
が之に付け加へて色、音、形、組織を辨別し得る自分の能
力を意識する機會から悦と利益とを得る。

感覺遊の例。

1. 觸覺　目かくしをした子供が熟知の物を、手で觸て見
てある。その物を何か柔かい地質の袋に入れればゲーム

の程度を少しむづかしくする事が出来る。

2. 聽覺　子供達は目に見えぬものを音に依て識別し或は
その位置を識別する。同様の遊びで一人の子に他児をその
聲であてさせる事がある。

3. 視覺　子供が目をかくしてゐる間に三個以上の物を一
列にならべて置く。その中の一個を取りのけ或は順序を變
へる、目をかくした子供は不足の物の名を云ふか、或は元
の順序に置きかへるかする。

筋肉鍛練のゲーム及遊戯。

1. 器具を用ひて　身體構成的發達は必要に應じては匡止
的鍛練を行ひ又賢い指導による戶外活動も含む。石けり、
鬼ごと、子取ろ、等は有用であるのみならず現今戶外遊園
に見る所の遊戯の形式である。

それには簡単な板すべりやブランコ、シーソー、階級、
みぢかい梯、棒昇り、繩のぼり、適宜な高さの機械體道具
及その他の遊戯道具も含まれてある。之等の活動は胸と腹
部筋肉と共に身體の軀幹を働かせ同時に手足を働かせる。
之等は子供の體力と勇氣を増進し、身體的制限に打ち勝た

うとする道徳的な決心をも増す。此の如き形式の遊びの器具

は冬季に體操場で行はれる。尙ほ場處が許すなら斯様な装置を教室の中に置く——必要に應じて用る様に——事は望ましい事である。簡單で面白い、身體の平均を取る練習は幼稚園の室の床に於てある枚の上を歩いたり走たりするのを覺える事である。暫時してこの板は床から一、二寸高くしてよろしい、それは子供達を一居注意深く身體の平均を取るようにする。室内の小さい階段も直ちに熟達しその頂上の段に座て新しい視點から見下し得た事を子供達は大そう喜ぶ。幼い子には昇りはじめに櫻の爲に階段に手指が必要である。室内で用ひる其他の器具にはモンテッソーリーの併行棒がある、——頂上が三インチの板で其上に子供達は腕をやすめ胴の重みを足に支へさせぬようにし足は下の方の横木にのせて運動する——。

2. ボールのゲーム 幼稚園時代の子供はゴム毬を轉がしたり、ついたり、投げたりして用ふ。他のゲームをするに先づて子供達は六インチの大きさのゴム毬で十分自由に遊ぶ機會を與へられるべきである。——ゴム毬遊びを知り又

自由にそれを扱ひ得る様に——。

初めにする毬のゲームは簡単で容易にし得るものでなければならぬ、次いで一層多くの技巧や練習を要するものへうつる。例へば子供達は床に圓になつて座り一兒が圓を横切つて毬を轉がすと、それを受けた兒がまた通り返しそれを續行する。も一層これをむづかしくするには各兒童が某と定めた子供へ圓を横切て毬を轉がすような仕方にする。第三の更にむづかしい方法は輪の中央に的を置いてゴム毬でそれを打つ事である、上手になればだんぐる的を小さくする。

同様にして毬をはづます遊びを始めそ、——より簡単なのはづましたりつかむだりする事から——。次で圓の中に一人の兒が立て代りぐるに他兒に毬をはづまして渡す。數人の子供が或回數か或は歌が終るまで毬をはづませ、その歌の終た時或は其回數のすんだ時他兒に之を渡す。豆譲やボールを投げてする同様な方法の遊びはもつと成長してからの方がよい。底無の籠やベルの附いたたがを通じて之を取扱ふ事は技巧を發達させる。これらは技倆や敏活さを増す

爲の多くのゲームの中の單なる例にすれども、リズム的な歌をうたふゲーム

リズム的な活動の遊戲は、室内を速く又遅く走たり歩いたり飛んだりする簡単な事——それは已に子供達が自由に爲得る——ではじめられる。やがて種々なリズムが紹介されるに至て子供達はそれを——各自おもひへーの方法で、——身體的運動で再現する。はじめは子供の活動を一定するよりもむしろ音樂の方が従的になるべきである。子供達が上手になれば種々なりズムや種々な速度に応じる力が出て来る。運動は例へば、少し歩きスキップし又歩く、或は歩き回轉し他方へ歩く、又前にスキップ横にスキップ手をつないで圓なりにスキップする等交互になつて居る。そして斯様な變化は子供達から暗示されるのである。フォーカダンスや歌ふゲームの特色である動作形式や簡単な歩き方

劇的遊戲

四歳から八歳の子供達は「兒童の自發的想像の黃金時代」である。

模倣は生理的及感覺運動形から劇的形式變化がある。觀念が實行となり、暗示的な環境の活動が心像を刺戟し、それが劇的形式に再現される。

子供が自發的に玩具や手近いもので劇的遊戲をするとい

Dance a little partner, Sally go rond the stores, Our shoes are

made of leather, 等のゲームの形式へうつるのはほんの一歩である。——これらのゲームは言葉から暗示を受けて居る

が、言葉は變へてもよいのである。最も簡単なリズムの表現は、動作の優美と容易を増すのに價値あるものであつて一層藝術的なゲームの形式を自然に發展させる材料を供するのに價値あるものである。單純な素朴な歐洲の農夫の生活に起原してゐるフォークダンスの或るものは、其内容を十分子供に理解し得る様にする爲に變化させてよい。しかし多くの指導を要する入り組んだフォークダンスは年長の子供達——自己表現と同様に技巧を喜ぶ——に適してゐる。

ふ事は前の章に於て已に説いたことである。

家事遊や他の社會的活動は要目の主題により或は又他の思ひがけない經驗に暗示される。斯様な種類の遊では子供は自分が興味を持た活動をよく知らぶと努力する。教師は同情を持て子供の活動を生活に眞實である様に又遊戲の意義を豊富にする様な事件を附け加へて一層完全な相關的な動作に導く。それには子供が理解しようとする活動に一層直接な經驗を與へ又想像する様に誘導する質問を出し或は游戲其他之に關する活動を提案するがよい。例へば店遊びをするのに最初は子供達はたゞ賣買のみに餘念がない。ざいつまでも其狀態が續いたら教師は「御馳走にするのに買いた物をお母さんはどうなさるでしょう」もしお母さんが買ひに行かれないと何時閉るのでせう」等といふ問を出す。日程に提案された劇的遊戯の主題は「赤ちゃんの世話」「日々の家事」「玩具店へ買物に行き、うそつこの玩具で遊ぶ事」「雪で雪人形を造て遊ぶ事」「郵便配達」「鍛冶屋」「消防隊」「汽車」「學校」「園藝」其他一般子供の周圍にある簡単な事柄である。之等のゲームは子

供と教師の間にやりとりをさせる。教師の子供の考に對する同情と友情とにより子供は遊戯の意義を明かに理解し得る。子供の想像が發達すると彼等はお話を劇化しようとする。教養ある家庭から來る子供達は幼稚園時代に早くこの劇的遊戯を提案しあ話の中の人物になる子供達を自分で選みその筋を演じる。かくしてお話を依て満たされた想像的經驗の價値が増大される。然しこの種類の遊戯は常に表現を要求する感情的興味を作ふといふ事を念頭に置かねばならぬ。

「三匹の熊」「三匹の牡山羊」「五匹の小さいリス」の如きお話をよつて暗示された遊戯は幼稚園の子供に適する遊の例である。劇化「畫くこと・言語」との關係は言語の章に於て述べたので此處には略す。

多くのリズム的活動の遊戯は劇的要素を持つてゐる。例へばフエアリーの様につまさきで歩き、巨人の様に重げに歩き、兵士の様に行進し、馬の様に、ランニング、ギャロップ、ビング、ドッロツティングし、シーソーの様に腕をのばして身體を曲げ、獨樂の様に回轉し。實際に繩がなくてもス

キップで架空的に繩飛をし、時計の振子の様に腕を振る等之等の遊戯の形式は子供の興味の自發的表現として、活動に物と再現された時、非常に價値あるものである。之等の中の或るものは歌を伴ふ形式をもむ。Neidlingers Seesaw や Miss Crauford の His is the way my dolly walks, は即ちその例である。

他の劇的な遊戯から I went to visit a friend oday & Who will my toys? の如きリズム的なゲームを生ずる。幼稚園の遊戯が、正しく理解され賢い進展を來す時には、子供達はその感情生活を喜んで自由に發表する事が出来る。

幼稚園の遊戯及ゲームの或る規範を表せば次の如くであ

る。

一般的な或は少くとも、一層大なる経験へ子供の興味を導くに足る處の、價值ある内容を持つべきである。

漸次簡単に、然し純粹な藝術的形式をとらねばならぬ。すべてゲームの價値は次の如き問を以て試みられる。

これは子供の興味から起たか、そして子供達はそれを喜んでするか。

このゲームは漸次主題に適當な形式をとる事が出来るか。このゲームは形式及内容の兩者に於て、更に發展し得る價値ある内容をもつか。

これら以外の技術と充分な表現とを要求するゲームを、くりかへす事は形式が完全であるか或はくりかへす毎に變化を來すか、そのいづれかでない時はそれは時の浪費であり發展の妨である。

ゲームが絶えず教師からの匡正せられたり暗示を受けなければならぬ場合には、ゲームの形式が兒童に取てむづかし過ぎるか又は子供達の興味が起てるなかつたかを表すものである。

効 果

態度、興味、趣味、自由なる劇的遊戯に於ける思想發表の容易、藝術形式を有するリズム的な活動の享樂。

習慣と熟練。ある身體的缺陷の匡正。筋肉の鍛練、身體の輕快。

智識。強制及熟練を要するゲームを支配する規則の認識。自然及社會に關する活動に對しての一層理智的な興味。

海外記事 幼稚園・小學校の初等年級のプロゼクト

女兒に人形の家——男兒に飛行機——樂しき集り

女兒の人形の家

學年の始め幼稚園の殆半數の幼兒は始めて家庭を離れた子供達であるので、幼稚園で第一に取扱はふとする計畫は出来る丈子供達の家庭經驗に連絡を付けようと心掛け、室内で材料を持ち遊ぶ時の子供達の自然な傾向や興味に注意した結果、人形の家が女兒に計畫され飛行機が男兒に計畫されるに至つた。

新學期の第二日の朝早く保母は子供達を呼びあつめて、以前に製作されてあつた種々の物を見せ、それに就いて皆で話し合たり、それで遊んだりさせた。その事が元に成て或る子供達は四つ五つの極く雜な紙の飛行機（二つの紙片を糊ではりつけたもの）と種々な色の紙人形の布團とが出来た。その出来は大層駄雜なものではあるが子供自身の努力

力であるので保母は大に之を賞讃し男兒に飛行機の歌を唄つてきかした處子供達は大層興に乗てやがて保母と一緒に唄ひはじめ直さにそれを覗えてしまつた。その次の日保母は多少誘導の意味で「誰が私達の飛行機に乗るだらうか」と云つた。女兒はすぐに人形を作り度いと云ひ出した。かうした自發的反動からして其次の日には輪廓を畫いた人形の紙が各々の机の上に置かれた。子供達は大層喜んでそれを剪り抜き色をつけた、創造的機會を與へる爲に保母は種々な色の繪縮紙を渡した、子供達は其の中から自分の好きな色を選み人形に思ひくの着附をさせた。仕事が一くぎり終た時再び保母は子供達を呼びあつめ先づ彼等の努力を賞讃して後批評した、まづ人形の髪の毛が紫や綠や青の色をして居たので「お友達同志お互に髪の毛をさらんなさい」と云つた、子供達はお互に見たり話したりの結果、

こけ茶と黒と黄が髪の毛の色に適してゐるといふ事に決定した。次に着物は手も足もくるんでしまつてあつたのが自分々々の着物を注意して見た後袖を付けたり裾を短かくする事を明瞭に知るようになつた。かく日毎に僅かの問を出して話し合ふ事に依て或る改善や進歩が加へられて行た、保母は遊ぶ時と此の話し合ふ時に進歩の基礎を與へようと常に心掛けて居るのである。然し何時でも子供達は保母の間に對して必ず自分で考へて答るのである、此の話し合の時に保母は一番美しい人形を取り上げて「或時私は可愛い人形を持てるた」といふ歌をうたつた處女兒は一週間で皆その歌をうたへる様になり男兒までもそれを覺えた。

それから家具やお室が積木で造られ紙布團が造り足され人形の遊び場がおひらく創造されて行く。又人形も毎日靴下や下着が加へられ、それが各々着色されるまでになつた、着物はだん／＼良いのが出来コートや帽子が作られた（自由表現として）。

或日机の上に一つも人形の型がなかつた、保母は「人形を書く時間がありませんでしたから今日は自分で書いて下

さいませんか」と子供達に頼んだ。子供達は驚く程上手に人形の輪廓を剪り上げたので再び保母は畫く必要が無かつた。

同様な方法で自由な試みの時にテーブルやテーブルかけ椅子皿等が造られた。積木の家は男兒が積木をのぞむ爲度々邪魔されるので女兒は積木の代りに家から帽子の箱を持て來た。ボール紙が餘り硬い時には保母が箱に窓穴を開けた。紙製の家具が多く使はれた後ボール箱で椅子テーブルを作る之等の家具は持ちがよいので彩色された又家の床は茶色に塗られ壁は眞當の壁紙で貼り家の外側は白く塗り皺紙を赤く塗て屋根が出來、リボンレース布の見本をカーテンに用ひた（各自の好みに依て個性が表れてゐた）紙の花を庭に置き岩で小道を作た。庭の事に就いて話し合った事から思ひ付いて子供達は實際に庭に花を植えた。家が出来上ると積木を作て布の塵を掃除した又家が汚れると掃除日を作た。積木で百貨店を作り珠數珠を罐にした。

男兒の飛行機

これと同時に男兒は此の人形を乗せる飛行機を組立て居た、紙で作る事を暫く續けて後種々な繪をよく見てボール

紙や木で爲はじめた（勿論自由表現として）飛行機には二つの翼がある、翼は機體より大い、尾の方が小さい、翼に二つの記號がある、操縦者とプロペラが要る、操縦者の席と客席の席が要る操縦者は茶色の服を着てる等の事に就いて子供達と保姆は皆で語り合ふそしてだんく、正しい形に改善された。このボール紙と木とで二週間も試みた後保姆は子供の力以上の高い標準を持たせた爲に木製飛行機の製作方を示す。子供達は板を十六インチに尾の方を四インチに翼を十二インチに鋸る（かくして十二インチが一フートに成る事を自然に學ぶ）又各翼の端を二インチに計て記しそつ翼を正しい點に釘付けにする。子供達は各々飛行機を仕上た後室の隅に出來た工場で紙のお金五拾錢を受け取る、其後飛行機は又色を塗り合衆國郵便飛行機として女児の處へ郵便を運ぶ。標^{シル}は赤白青で乘席とプロペラと操縦者が加へられ格納庫が積木で造られた。

樂しき集り

之等の物が出來ると人形の會と自分達の會を一處に開く事が決議された。皆大喜びで或子は嬉しいので自分の飛行機を種々な色紙の線で裝飾しはじめた、然し合衆國の郵便飛行機は赤白青だけで飾るべきだといふ事を皆が決めた。會の爲に愛國的の目覺める様な飾りが紙の鎖や線で出来た。人形は新調のよそ行の着物をさせられお玩具の皿には砂の御馳走が充された私達の御馳走には研究の爲庭に蜂を飼てあつたのでお菓子と一緒に蜂蜜を用ひた。

効 果

右の様なプロジェクトを幼稚園の要目に取り入れた利益を總括してみると、まづ子供達の經驗が廣められた——家飛行機、格納庫の種々な繪を見たり又苗床を見に行たり雜貨店へ出かけたりする事で——。

言語は、話し合の時に非常に發展した、完全な文章で話す事を教へられ又如何にして明白に自己を表現すべきかを

學んだ。又操縦者、格納庫、乗客、プロペラ等の單語を澤山覚え、お話を聞たり詩を學んだりした。

音樂では自分の作てゐる物に就いての歌を覚え心から興味の湧いた時にそれを唄た。

手工では鋸や槌の使用方を學び剪り貼り又クレイヨンの用方を學び就中創造的能力が進歩した。

計算では、貨幣の價值を知り十二時が一沢の事や定規の用法を學んだ。

子供達は作つた物を持ち遊ぶ時劇的遊戯をした、人形は毎日飛行機に乗り人形の家は毎日掃除された（それは衛生に關した事である）

又禮儀の習慣が増した、即ち女兒の人形を飛行機に乗せる時男兒は「私の飛行機にお乗りになりませんか」と云ふ事を、女兒は「有難う御座ます、何卒」といふ受方を覺えた。

子供達は保姆に尋ねるのに自分の番まで待たなければならなかつた。又一つの仕事に二時間も集注する事（室内に他人がは入て來るのも知らずに）を學び、一物に向て日日

働いて續けるのである忍耐を確得した。

又何も造らないと遊ぶのに何もないで仕事の價值を學んだ。

毎日休み時間に遊に出る前にはテーブルや室を掃き清めなければならぬので清潔を學んだ。

保姆は或日は女兒の爲に他日は男兒の爲に働いたので一方と働いて居る間他方は全然獨立で爲なればならなかつた爲に獨立獨行を學んだ。

蓋し子供達の學んだ最も價値ある事は一つの問題を考へそして、それを解決する方法であつた。そして實際、

「どうして人形を作らうか、飛行機の標をどうしようか、人形の他處^{ヨツ}_{ユキ}はどうしたら作れるか」といふ様な問題が毎日起きた。

右のプロジェクトを實施するに當て保姆は或進歩に注意し母親達は家庭に於て子供に新しい性質の見える様になつた事を語つた。

お

春

東京女子高等師範學校教授

岡田美津

二 伯母の家

乗合馬車が「ゴロゴロ」と煉瓦の家の横手の入口に着いた。幸兵衛爺さんは、お春を上等の婦人客にするやうに馬車から助け降ろした。お春は、淑やかに用心深く降りて、グタリとなつてゐる花束をおみね伯母さんに渡した。伯母は申譯ほどのキッスをお春に與へた。そして愛想もなく

「骨折つて、花なんぞ持つて來ないでもいいに。時節が來ると、うちぢや庭中花になるんだよ」といつた。

およね伯母さんも、お春をキッスしてくれた。この伯母の方がおみね伯母さんのより少しほ情がこもつてゐた。およね伯母さんは、

「幸兵衛さん、上り口のところへ鞆を入れておいて御くれ。午後二階へ上げるやうにするから。」と言つた。

「もしナンなら今二階へ上げてもえゝが。」

「なに、いゝよ。馬を打捨つて置くと不可い。いまに誰が通る。だらうから呼び止めて頼むよ。」

「ぢや、お春さん、さよなら。みねさん、よねさんも左様なら。その子は、軽やかな兒だよ! 相手にするにや此上なしだ。」

おみね伯母さんは「賑やかな」といふ形容詞をきいて、身慄ひをした。この伯母は、昔氣質で「子供は止むを得ぬ時は、人前に出てもよいが、聲などを人に聞かせるものでない」と信じてゐたので、

「喧嘩けんかいのは困るよ。およねも、私も」と卒氣なく言ひ放つた。

幸兵衛爺は、これや失敗しこうたと思つたが、自分の考かんがを先方さかほうに解るやうにすらへと説明する事なんかごく不得手なので、そのまま馬を駆して去つてしまつた。心の中では、あの面白いお春を「賑やかな」と言はないで、何とか、もつと穏やかな言ひ方があるかしらと考へて見た。

おみねは、

「さ、連れていつて御前の部室へいしつを見せて上げやう。その蚊除けの網戸は、あとをしつかり閉めておくのだよ。蠅あぶや何か入らないやうに、まだ蠅の出る時節ぢやないが、始めからちやんとやりつけないといけない。風呂敷包ふろしきいはんを一所にもつて御いで。さうすればまた取りに降りて來ないでもいいだらう。いつでも、よく考へて無駄足をしないやうにするのですよ。その敷物で靴くつを擦こすつて。こつちへ來ながら入口で帽子と外套えいたいを掛けと。」

「これ私の他所行の帽子なの。」とお春がいふと、

「わや、二階へ持つていつて押入に御入れ。乗合馬車のりあわましゃで來るのに、一番いゝ帽子を被らなくてはよせうなものだね。」「だつて、之そのあらわゆないんすもの、平常用ふつうようのはあんまりひどくて、持つて來られなかつたんです。あれは愛子がかぶるの。」

「その日傘は支關の押入に入れてお置き。」

「あのう、私の部室に置いてもよいでせうか。その方が大丈夫らしいから。」

「この邊に盜賊とうじゃくなんか居ないよ。居たつて、御前の日傘をねらふものがね、ま、いゝから御出で。二階へはね、いつで

も裏階段から昇るのだよ。絨毛があるから表階段は使はないのだから。曲り角に氣を御付け。足を突掛けないやうに。

右の方へ行つてそこだ。御入り。顔を洗つて髪を直したら階下へ御いでなさい。いまに鞆の荷を解いて上げる、そして夕飯までに片付けてしまはう。……御前の着物は後前になつてるのぢやないかへ。」

お春は顎を下へやつて、薄べらな自分の胸の中央に、縦に行列してゐるボタンを眺めた。

「後前だつて？あゝ！この事なの。いゝえ、これでいゝの。子供が七人もあると、一々着物のボタンをはめたり外したりしてやつて居られないのよ。……みんな鉢々にさせなくてはね。だから宅では、みんな前ボタンなの。みいちやんなんか、やつと三歳だけれど、やつぱり着物は前ボタンなの」

おみねは、何とも答へずに戸を閉めて去つたが、その顔には言語以上の意味が現はれてゐた。

お春は、部室の真中におつ立つて見渡した。一つ一つの道具の前には真四角な油布が敷いてあつて、ベッドの前には、絨毛が敷いてあつた。その「ベッド」にはへり取りの白い「デミチ」地の敷布が掛けあつた。

何もかもがあくまで清楚してゐた。天井は、お春には珍らしい程高かつた。北側の室で、細長い窓から臺所や、納屋などの方を眺めるやうになつてゐた。

お春は、日傘を室の隅に立てかけ、他所行の帽子を、もぎり取るやうに脱いで、鏡臺の上に投り出し、ベッドの真中へそくさともぐり込んで、敷布を頭から被つてしまつた。こんな眞似をしたのは、その室が厭なからではなかつた……この部室は實家のお春の室よりも餘程いゝ室だつたのだから。さうかといつて、景色がわるいからでもなく、長い旅をしたからでもなかつた……お春は疲れたとも、何とも思つてゐなかつたのだから、ではといつて、見知らぬ處だからでもなかつた……此兒は、變つた處が好きで、變つた氣分を味ふのを好んでゐたから、實はこんな眞似をしたのは、自分にも譯の分らない感情がさまざま入り混つて起つて來たからなのであつた。

やがて、部室の戸が静に開いた。この河崎村では、戸を敲いて案内を乞ふなどの上品な事を決してしなかつた。よしや、したとしても、子供に對してまですることはなかつた。

おみねが入つて來たのであつた。彼女は部室に人の居らぬのでキヨロ／＼見廻はしてゐたが、敷布が白く波を打つて、海のやうに高く低く搖れ動いてゐるのに氣が付いた。

「お春！」

その一言の中に屋根の上から機音聲に呼ばははつた程の力が籠もつてゐた。

黒い、もしや／＼の頭と、二つの怖／＼たや／＼な眼が白い敷布の外へ現はれた。

「書間から何だつて、床の中に入つて、綿をくしゃ／＼にしたり、埃だらけの靴で、枕を汚したりしてゐるのや。」

お春は、申譯がなき／＼に起き出した。何とも言譯の語はなかつた、辯解の途も託言も叶はない程の大罪だつた。

「伯母さん、御免なさい。……私どうかしたのよ。自分にも解らないの。」

「フン、まだがきにそんな氣になるなら、伯母さんの方にも考があるよ。さすがその床を鐵を伸して平におし、今、お前の鞄をこゝへ持つて來て貰ふのだから。他にこんな散亂かつた室を見られたら困る。村中に觸れちらかされるもの。」

II お 春 の 手 紙

母さん、私無事に着きました。着物は、さう、くしや／＼になりませんでした、そして、およね伯母さんが、手傳つて押しきをして下すつたの。私、幸兵衛爺さん大好き。煙草をしやぶつたりするけれど、新聞を戸口へ上手に投入れるのよ。私、暫くの間、馬車の外に乗つてゐましたが、御みね伯母さんの家に來る前に、中へ入つたんです。入りたくなかつたけれど、母さんは、私にさうさせたいだらうと思つたから、御みね伯母さんと、一々書くのは長いから、これから手紙に

は、「み」さんと「よ」さんが字引を下すつてね、六つかしい字を御引きつて。隨分時間がかかるのよ。口で話す時には字なんかを考へないでもいいから、嬉しいわ。書くより話す方がぐつと落(らく)て、そして、面白いわ。」

この煉瓦の家は、母さんの御話なすつた通りで、ちつとも變はつてゐませんよ。御客間は立派ね。中を覗くと身體がゾクゾクと震へるよつよ。飾つてある道具も立葉ね。どの室も氣樂に座れさうな場所がなくて、……まあ臺所だけ位、昔の猫が居ますよ。でも、こゝの家では子猫が生れても、生かして置かないんです。親猫はもう年寄りで、ぢやれたりしませんよ。うちの花姉さんが、母さんは、父さんと一所にこゝの家から逃げたんだつて私に話しましたが、こゝを逃げ出したら、おぞよからうと私にも思はれるわ。もし「み」さんが逃げたら、私「よ」さんと一緒に居たいと思ひます。「よ」さんは「み」さんほど私を嫌がらないから。政次に私の繪具箱をやつて下さい。たゞ、若しか私が歸宅つた時の用心に、赤色だけ使はずに置いてくれつて言つて頂戴。

花姉さんと太助(おとやな)とは、私の役だつた仕事までして、いやにならないでせうかね。

春 子

『母さん、今朝は私悲しさが身に染み渡つてゐます。之は「醫師の妻」の中にある文句よ。その妻の姑が意地悪で、御嫁さんには無情なのが、丁度「み」さんが私にするやうなの。花姉さんが、こゝの家へ来ればよかつたと思ふの。伯母さんは、花姉さんを招びたかつたんですし、姉さんは私よりも善い人で、口返答なんかあんまりしませんもの。』

私の薄黄色キャラコの切れ橋があつて？ 「よ」さんが私の着物の背中に飾りボタンを付けるのですつて このまゝではあんまり見ともないのでせう。この河崎村の人の風(スタイル)はなか／＼洒落てるるの。教會に来る人達のなんか畑ヶ谷のよりも立葉ですよ。

學校もまあ面白いわ。こゝの先生の方が畑ヶ谷の先生より餘計何か知つてゐます。けれど私の間を全部答へてはくれな

いの。私は大抵の女生徒よりもよく出来ます。唯一一人私の及ばない女生の児がゐます。男生徒の方の二人には私、とても及はない。そのよく出来る、金子しまつていふ児は、頭の中で否、妻みたやうに加へ算や引き算をしてね、どんな字でも正しく書けるけれど、何にも頭に考がないの。讀本の三をしてゐます。でも、本の中の話なんか嫌なの。私は、讀本の六をしてるるけれど、掛け算の九々が出来ないもんだから、下山のちいさな双生児のるる組に落とすつて、寺岡先生が嚇かすんです。

私、毎日午後に縞木綿の着物を縫つてゐます。金子しまさん達の下山の家の子達は、御母さん達に知れない時は、河のどこで飯事をしたり、驅けたりしてゐるのに。お母さん達は、水に落ちるといけないつて心配するんです。「み」さんは私が着物を濡らすだらうつて心配して、やつぱり私に行かせないの。四時半から晩の御飯までと、晩御飯後少しひと、土曜日の午後だけ、私遊べるの。

こゝの家の牛に一匹子供が生れました、斑のあるのが。今年は、林檎りんごと枯草かくそうが出来が宜いんですね。母さんと太助たすけは悦んでゐるでせう。……抵當あきらめの方へ餘計拂よそひへるから、寺岡先生が何のために學門がくもんをするのですかつて御尋ごじゆになつたから、私の目的は抵當をはやく片かたを付ける爲ですつて言つたの。したら、先生がそれを「み」さんに話したもんだから、罰たたきだつて、餘計に御裁縫ごさいほうをさせられたのです。伯母さんは、抵當なんていふ事は、泥棒ねぼをしたり、疱瘡庖瘡に罹る位耻位恥かしい事だつて、そしてうちの地所が抵當になつてゐるつていふ事が村中に擴まるつて言ふのよ。金子しまさん達は、賀田林三かたはやさんだつて、抵當はないの。下山の家はあるの。

春 子

『太ちゃん、いつか御前と私と犬を納屋なやに括りつけたら、繩に噛みついて吠えたわね。私、丁度あの犬みたやうよ。たゞ納屋でなくつて煉瓦の家なだけ。それに「み」さんに囁みつくわけには行かないわ。私感謝しなくてはならないし、恩門おんもんをして私がものになつて、御前に加勢して抵當の片かたを付けなくつちやならないから。』
はあちやんより

四 學 校

お春は金曜日に到着たのでその次の月曜日から、七八町離れた元河崎の小學校へ通ふことになつた。御みね伯母さんが、隣家から、馬と荷馬車を借りて、お春を學校まで乗せて行き、寺岡といふ女の先生に面會して、教科書を揃へたり。何かして、お春を、學問の途に出で立たせやつた。序に話すが、寺岡さんは先生になる修業をした人でなかつた。教へるのは、あの人の生れ付きだ、とその家族は言つてゐた。そんな位だから、兒童の腦力だの、周圍の状況などに、御構ひなく、この先生は、誰も彼もを、たゞ一様に教へてゐた。丁度、ある博物學者の話に、海猫がカナダの湖水に居ると同じに心得て、ロンドンの三階の室で、堤をせつせと築いたとあるやうに、寺岡さんも、自分のやつて居る事は、兒童の頭に、智識の土臺を築いてゐるのだと思つて教へてゐた。

お春は、二日目から歩いて學校へ通つた。これは、一日のうちの樂しみの仕事だつた。天氣が良くて、露があまり甚く置いてない時は、林の中の近道を行くのだつた。大通りから横に外れて、森田の家の柵をくぐり抜け、賀田の家の手を追ひ拂ひ、牧場の、咲いてゐる花の中に踏み堅められてゐる小道を傳はつて行つた。それから岡を一つ降りて、小川を、石から石へと跳んで渡つて、日向で眠さうに眼をパチ／＼させてゐる蛙を吃驚りさせたりした。その先が樂しみな林なので、辺る足の下には、褐色の松葉が一面、落ち敷いてあり、枯樹の切株のぐるりに、紅い黄いろい茸が、一晩の中に、によぎりと出てゐたり、蟻のやうなパイプ茸が、危なく、踏みにじつてしまひさうなところに、不意に見付かつたりするのであつた。それから階段を越して、草原を抜けて、又柵をくぐつて、大通りへ出ると、三四町の得になるのだつた。
こゝを行く時のお春の嬉しさといつたらなかつた。文法の本と、算術の本を抱へて、今日習ふところはよく豫習であると思つて歩いた。御辨當箱を右の手にぶら下げて中に入つてゐるバタと蜜の塗つてあるパン、ドウナツ、生薑入りの御

菓子を嬉しいと思つて彼女は歩いた。時には、その週の金曜の午後、暗誦する筈の詩を、聲を出していつて見た。

武士は、アルジエの原に死なんとす。

看護の婦人のかけもなく、

涙を濺ぐ女もなく。

こ吟じて見て、お春は、その句調を、その感じを賞でた。も一つこの兒の好きな詩は、

樵夫よその樹を赦るせ。

枝一つにも手をな掛けそ、

若かりし時

その樹蔭我を庇へり。

今ぞ我、彼を護らむ。

であつた。

金子の御しまが、お春と一所に近道をしてゆく時には、二人で、この詩を身振り入りでやるのだった。おしまは、いつも樵夫になりたがつた……只斧を空に上げる振りさへすればよかつたから。一度、おしまはその情的な、樹の命ををする人の役をした事があつたが、あんまり馬鹿々々しくつて演つてゐる内にいやになつたといつて、「一度とその役にならう」としなかつた。お春は内心之を悦んだ……立役をしたいと思ふこの兒には、樵夫の役は、あまりに平凡だつたから。お春は、詩人の熱烈な哀願の句に心醉して、樵夫さんに「なるだけ斧を取つて冷刻に振舞つて頂戴。そうすると私が、一層情を籠めて哀願の句を述べるやうになるから」と言つた。ある朝など、お春は、平常よりも氣まぐれな心を起こして、樵夫の前に膝まづいて、その裾に縋つて泣いた。併し、さすがに之はあまり極端だと思つて、すぐ止めてしまった。

「これはいけない。馬鹿氣てるわ、でも、この身振はね……あのう、「三粒の米を我に賜へ」の詩には、當てはまるでせう。あなたが御母さんで、私が餓死にしかけてる子供になるわ。……まあ、さ、その糸を御捨てなさいよ。ちうあなたは樵夫でないんだから？」

「ぢや、私、手を如何して居たらいいの」とおしまが訊ねた。

「如何でも好きなやうになさいよ。」と、お春は面倒くさうに言つて「あなたはお母さんなのよ……それだけでいいの、一體あなたのうちの御母さんは手を如何なにしてるて？　さ、しあせう。」

母さんお米を三粒ト下さい。

唯三粒だけ、どうぞ！

すると、私の命の糸が

明日の朝まで續きます。

學校は岡の上に立つてゐた。そして屋根に旗竿があつて、正面に、男生と女生との別々の入口があつた。右手には、野や草地が高く低く續き、左手には、松林があり、遠くに、河が光つてゐた。室内には、これといふ目を悪くものは何も無かつた。教壇の片隅に、教師の机と椅子があり、あとは、無格好のストーブに、地圖が一つ、黒板が二つ、隅の棚に、水桶と長柄の柄杓、それに、生徒用の机と腰掛が二十ばかり。その腰掛け室の後部にあるのが背が高く、上級の足の長い生徒が之を占めることになつてゐた。窓に近くて先生に遠いので、一同がそこへ行きたがつた。

級が別けてあつたのだが、さればといつて、誰一人他のものと、同じ本を習つてゐるものもなく、何學課でも、同じ程度に進んでゐるものは居なかつた。ことにお春と來ては、どの級に入れていいか分らないので、寺岡先生は、半月経つてから、どこへも入れぬ事にしてしまつた。それで、讀本の時は、お春は、中學に入る準備をしてゐる賀田林三と、金子精

一と一所にやり、算術の時は、下山の舌たらずの鉢ちやんと習ひ、地理は、金子おしまと一所で、文法は放課後に一人で先生から教はつた。いろんな奇抜な考は脳裡のうりに一杯ありながら、字を正しく書くのに骨が折れるので、お春は、自由に思想を現はせなくて難儀をしてゐた。

歴史はお春のお得意で、あまりどしどしへ進んだ爲、此上は、下山の一番上の男兒の級に入ることになりさうなので、彼女は急に、歩を緩めてしまつた。どうも、下山シーソー君と連れ立つて智識の途をゆくのは楽しくもなく平穏でもなかつたから。下山三太は、始終グラグラして物を決定しない性なので、シーソー君と仇名がついてゐた。實際の事實でも、日取りでも、水泳でも、魚釣りでも、本を借りるので、一文菓子店で、菓子を買ふのでも、かうと決めるすぐあとから、まるきり反対の方に變るのだつた。シーソー君は、顏色のわるい猫背の子で、氣が揉める時には吃的癖があつた。かうして弱點がある爲に、シーソー君は、お春のきびきびした氣性にすつかり引付けられてしまつて、お春がいくら手厳しく彼をやつづけても、お春から眼を他へ向けかねてゐた。お春が靴の紐が解けたのを結ぶそのやりかたの威勢のよさ、ものに夢中になつた時、黒い御下駄を肩の邊りで搖ぶる工合、机に本をのせ、腕を拱んで、正面の壁を見据えて暗記してゐる姿勢、どれもこれもが、シーソー君の心を恍惚こうごくさせるものであつた。先生の許を得て、お春が隅の水桶の處へいつて、柄杓から一杯飲んで來ると、シーソー君は、何としても、立つていつて一と飲せずには居られなかつた。お春の次に水を飲むといふ點に一種の親しさがあるばかりか、途中でお春に行會つて、あのすばらしい眼で、冷やかに見下みくだされるのが、慄へるほど嬉しかつたのである。

夏のある暑い日に、お春は、もう度外れに、のどが渴いた。水を飲まして下さいと三度目に先生に乞ふた時、先生はよろしいと言つたものの、お春が教師机の近くに來た時には、先生は不機嫌らしく肩を上げた。お春が柄杓を放すと、シーソーがすぐ手を擧げた。先生は、うるさけに許可を與へた。

「春さん、あなた如何したのですか」と先生がいふと。

「今朝の御飯に鱈鰯をたべたんです」とお春が答へた。この答は、事實を述べただけで、何も可笑しい事は無かつたのだが、室中の子供が笑ひ出してしまつた。

寺岡先生は、自分の言つたのではなく又自分に解らぬ滑稽は厭だつたので、顔を赤くして、

「春さん、五分間その桶のところに立つてゐらつしやい。すこしは、のどの渴きを我慢するやうになるかもしねない。」

お春は、胸がどき／＼した、水桶の脇に立つて、學校中のものに見られてゐる！思はず、不服の態度になつて、自分の席の方へ一步進みかけた。すると、先生がもう一層きつい聲で命じたので、お春は踏止まつた。

「桶のところに立つてゐるのです！三太さん、あなた、今日は何度水を飲みたいと言ひましたか？」

「これで、四……四度目」

「もう柄杓を持つつのはありません！今日は學校中の人があ水ばかり飲んで、何もしません。勉強の時がまるでないのです。三太さんも、鱈鰯をたべたのですか」と寺岡先生は皮肉に尋ねた。

「お……お春さんみたやうに、ほ……ほくも……さ……さばを食べたんです」「全校舉つてクス／＼笑ひに陥つた」

「さうだらうと思ひました。三太さん、桶の向側へいつて立つてゐらつしやい。」

お春は、恥かしさと、腹立しさで頂垂れてゐた。人生が堪へられぬ程暗黒になつた。罰せられるのさへ厭なのに、下山シーソーと並んで罰を受けるのは、人間として忍びうるものでなかつた。

午後、唱歌が最後の課業だつた。鳥飼きよが「我等河邊に集はん」を選んだ。今日の出来事に、何とやら關係のありけな題と見え、生徒等は、

我ら集はん

お

春

美しき河邊に。

といふ文句を、殊更強く勢込んで歌つた。

寺岡先生は、お春のうつむいでゐる顔をちらと見て心配になつて來た。お春の両方の頬が眞紅になつて、あとは眞蒼な色をしてゐた。そして涙が睫毛に宿り、息遣ひがせわしく、ハンケチをつかんでゐる手が、木の葉のやうに震へてゐた。

初の歌が終つてから、先生は、

「春さん。席に歸つてよろしい。三太さんは、課業がすむまでそこに居るので！ 皆さんに言つて置きますが、先生が春さんに、桶のわきに立つて居るやうにと言つたのは、水ばかり飲みたがる癖を直すためなのです。學課に身を入れないで、室の中をあちこちと歩きたいから水々ついふのです。今日、春さんが水を飲まして下さいといふたんびに、皆が、あとからあとから飲みに行きました。春さんは、ほんとに、のどが渴いてゐたんだから。ほんとは、眞似をした皆さんを罰する筈でしたらう。……」などは何を歌ひますか。」

「古釣瓶」

「もし水に縁のないものを御考へなさい、「御國の民」でも何でも。」

お春は、席に歸つて、唱歌集を出した。寺岡先生の全校への説明で、心の重荷が少し他へ移つたので、他に顔が合はされぬ程でもないと思つた。

唱歌といふ窮屈でない課業を幸ひ、諸方から同情の意味の御遺物が、お春の許へ届いた。金子精一は、黒板へ地圖をかきにゆく途中、お春の席を通りて、楓糖を一片落としていた。鳥銃きよは、ごく新しい石筆を、足で轉がして、お春のところへよこしてくれた。隣席の金子しまは、紙を丸めた球を山と積んで「〇〇射撃に用ふる弾丸」と書いて見せた。

お春の生活に光明が射して來た。文法を習ふので先生と二人限りになつた時には、お春はもう平氣になつてゐた。歸つ

て行く最後の兒童の足音も廊下に消え、シーソーが詫びたさうに後を見返つてゐるのを、お春は、冷やかに侮蔑の眼で見返してやつた。

寺岡先生は、やつと十八歳なので、田舎の小學校を教へてゐるうちに、お春のやうな兒に出遇つた事がなかつた。

「春さん、先生は、あなたを罰しすぎたやうな氣がする」と言つた。

「先生、私は今日一つも答をまちがへなかつたし、他と話もしなかつたんです。私、水を飲んだだけで、あんな耻かしい目に遇はないでもいい」と思ふ」と

お春は、聲を懾はせた。

「あなたがやり出して、他を誘つたのです。……とにかくさうらしかつたのです。あなたのする事を……たとへば、笑つても、内所の手紙を書いても、室外へ行つても、水を飲んでも一同がするから、そういう事は禁じなければならないでせう。

「下山の三太が人真似をするんです」とお春は腹立たしげに言つた。「私、獨りで隅に立つて居るのは構はないけれど……さういやではないけれど……あの人と一所はたまらないんです。」

「先生にも、それが解つたから、席に歸つていゝと言つて、三太だけ残して置いたでせう。あなたは他所から來た人で、皆が目に付けるから、氣を付けなくてはいけません。……さ、動詞の變化をやりませう。「ある」の動詞、過去完全、可能法の形は？

我は何々だつたかもしけぬ

汝は何々だつた…………

彼は…………

「例を擧げて」

「我は悦んだかもしけぬ

「汝は……」

「彼、彼女、それは悦んだかもしけぬ

「彼」だの「彼女」は悦んだかもしけないが、「それ」といふものは悦びうるでせうか」と寺岡先生は細かい意味をほじくるのが好きなのでかう言つて尋ねた。

「えゝ、出来ませう。」

「だつて「それ」は中性ですよ。」

お春は、しばらく考へてるたが、

「先生、花葵^{あわら}は、中性ですか。」

「そうですとも。」

「ぢや『花葵は、雨を見て悦んだかもしけないが、少さな弱い薺が一つあつたので、それが雨に打たれるかと心配で心から悦べなかつた。』といはれるでせう」

寺岡さんは困つた顔をして、

「花葵は、ほんとは、悦んだり心配したり出来る筈はないのですよ。」

「どうですかね……次は何」

「「知る」の假定法過去完了」

もし我あの時知つてゐたら

もし汝…………

もし彼

まあ、一番悲しい「時」ですね。もしも～つてね。知つてさへしたら、どうか都合よくなつたらうにと思ひますよ」寺岡さんは、そんな風に思つた事はなかつたが言はれて見れば、假定法は、悲しい「法」で、「もしも」といふ語は、なあけない語だと思つた。

「今の一例を擧げて御覽なさい。それで今日は御仕舞にしませう。」

「もし私が餃が好きでなかつたら、のどが渴かなかつたでせうに」

と、お春は華やかに笑つて文法の本を閉ぢた。

「もしあなたが、眞に私を愛したのだつたら、私を立たせはしなかつたでせうに。もし三太が惡戯わるわざを好きでなかつたら、水桶のところへ私の後をついて來なかつたでせうに。」

「それから」「もしお春が學校の規則を尊んだのだつたら、のどの渴くのを我慢したでせうに」と先生が言つた。
そして二人は仲よくなつて別れた。(以下次號)

雑報

専門家が養成員となつて一生懸命になつておられます。會の目的達成のために、講演會、講習會、研究會、展覽會、雜誌刊行等の事業が行はれます。詳しい事は東京市小石川區林町五十九番地、同會へ御照會なさい。

手工創作協會の創設 これも時代が生んだ必然的の施設でありましやう。教育の大切なことは何人も之を知りながら、その誤った方法は多くの子供の心に、嫌厭の種を植ゑつけました。然し、時代は今や教育の革命期、それは、教育を藝術化し、教育をもつと子供の生活に直接に關係あるものにし、世界を改造し、新しい文化を建設せねばならん秋にあります。智育の偏重、注入主義、拘束主義から子供を開放して、精神的の殘虐から救はねばならない。これが教育の革命を叫ばしめたそれらの缺陷への反抗の聲であります。では、革命の先驅者はなにものであらう。それは教育の藝術化です。圖畫、手工科を改善して、子供が直接に體験するこの學科を中心部隊として、そこに新しい教育をなし、尊い教育の使命を全ふしやうとするのであります。紀協會は正木直彦氏、山本鼎氏、倉橋惣三氏、樺田保之助氏、佐藤功一氏、岸邊福雄氏等を顧門とし、藤井祐吉氏、藤井弘祐氏、高村豊舟氏、今和次郎氏、本方秀麟氏、中川本元氏、廣川松五 氏其他數氏の各

阪神兒童相談所 醫學博士三田谷啓氏を所長として設立された本所は兵庫縣武庫郡精道村後堀樓上に置かれてあります。本所の目的とするところは、幼兒、學童、青年の教養の相談に應じ且つ兒童の教養に關する知識の普及を圖る爲であつて、その事實の内容は健固、學校選定、職業、教育等に關する相談を受け講習、講演、母の學校、修養會、處女會、家政補助婦會等を開き、又兒童に關する印刷物の出版、兒童教養展覽會、幻燈、活動寫真會等の催しております。

四季通しの林間學校 大阪市御津小學校では去年の四月から濱寺の海岸に、四季を通しの林間學校をつくりました。水に山に景勝の地を占むる松林の中で、體が弱いため他の子供達と同じやうに勉強したり、遊んだりするこの出來ない不幸な子供達を五十人づゝ母話して居りますが、大へん結果がよくて、一ヶ月もすると、見違へるばかり丈夫になるそうです。

編輯室より

灼熱の盛夏に入りました。海に山に暑さを避ける人々も多いこそでございましやう。併し、私共編輯室ではまだそれどころの話ではありません。一周玉の汗を流して、よい雑誌をつくる爲に苦心してゐますたゞへ、それが何の雑作もないやうなちよつとしたものであつても、創作といふことは實に並大抵ならぬ苦心と勞力を要するものであります。しかし、そのかわり、そこにまた言ひ得ぬ深い興味と満足が生れて來るのであります。

私共の本誌を作り上けるには、全くこの創作氣分に充たされ、極めて自由な編輯の反面、それだけ餘計に考も凝らし、案も練つて、一方ならぬ心こぼりを致して居ります。併し、それはやがて讀者の前に、有益な、興味の多い、氣分のよい、生氣に満ちた讀物を提供することになるので、それが私共の何よりの願なのであります。火のついたやうな忙しい思ひで作らなければならなかつた前月號の評判は、實はどうかと思つてゐましたが、豫期以上に受けがよく、讀者の數も非常に増加しまして、ほんとうに働き榮えのある清々しい心持です。最上の清涼劑です。益々可愛い、幼児の教育のために努力を惜まず、この大切な使命を果さねばなりません。

斯うして本誌が逐次漸層的に普及されて行くのは實に喜ばしいことで、私共はこの際一層奮闘して、小學校幼稚園は勿論一般家庭にもつゞく愛讀して戴き度いので、それには是非とも現在會員の方々の御骨折を願ひ、一人でも多くの會員を御説ひ下さるやう切望いたします。

幼稚園や小學校と家庭との意志の疎通を缺いてゐるが爲に、どんでもない間違ひや、誤解を演ずることは、私共の日々耳にするところですが、これなども、一般家庭の方々に本誌のやうな讀物の御愛讀を願へば、幼稚園や小學校のやつてゐる仕事といふものを理解して戴くことを出来、非常に親みも深く親なることであらうと思ひます。

發行所

教文書院

電話下谷三〇四七・一九五二番
振替東京四六一一一一番

文書院

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

印刷所

東京市京橋區木挽町二ノ十三番地

教文書院印刷部

無
禁
載
轉

東京女子高等師範學校日本幼稚園協會

第二十三卷第八號

大正十二年七月二十八日納本
大正十二年八月一日發行

御 注 意	定 價 表			冊 數	郵 稅
	一 冊	金 參 拾 五 錢	金 壹 錢		
普通面一頁	表 紙 裏 附	金 七 拾 圓	金 七 拾 圓	一頁以下御 斷	不 要
	金 四 拾 五 圓	同	同		
□本誌講讀御希望の方は定價表にて御拂込下さい 金下さい(東京四六一臺臺番教文書院)	□前金切れの節は帶紙で「前金切」を致します □郵券送金の節は一刻増で一錢切手に願ひます □本誌の一切は教文書院宛御照會下さい				

東京帝國
大學講師

文學士 上林福幸先生著

(最新教育
叢書第三卷)

三版

知能測定法

製上皮背版六四
圓五價定
錢拾參
料廿七
錢送

本書は個人的測定と團體的測定の二方面に亘り、知能測定の原理と方法とを叙述せるものにして、教師の實地練習のために、殊に豊富なる實例及び問題を加へ、其の施行法を説くことを懇切丁寧、學校は勿論、工場會社には必備の良書なり。

東京市學校
衛生技師
醫學士 山崎祐久先生著

新刊

兒童衛生的觀察及其實際

寫真版木版多數入

菊版上製

定價四圓八拾錢
送料二十七錢

兒童生徒の心身狀態を検査して、之に適應した處置を施すことは啻に學校衛生の眼目たるものならず、實に教育そのものゝ重要な條件である。本書は著者が各地に學校衛生主事として経験したる事實及び多年研究の結果を經緯として執筆されたもので、學校衛生の實際問題にふれ、その活用に資せんことに努め、林問學校、休暇聚落等についても詳説されてゐる。

發兌 研究教育會

京東神田區田永八番〇八八五京東替振

文學博士 佐々木信綱先生著

增刷出來

新刊

和歌の言

四箱定價
六入圓料
洋美五八錢
裝本錢十五
版送

若山牧水先生著

增刷出來

牧水歌話

四箱定價
六入圓料
洋美五八錢
裝本錢十五
版送

短歌として第一人者たる著者は新らしき歌の爲め、心得べき注意數十條を掲げ、新派歌壇の研究者に提
供せんこす。斯道研究者の好伴侶たり。

通町形人橋本日京東
番六〇五七京東替振
發兌盛堂全書林



歌へ！

清らかに高く

マンドリン

山杉高

本山木

著 芳春重

ヴァイオリン

獨 獨 獨 獨
歌 劇 習 練
奏 集 解 説

圓 行進曲集
舞 曲集
曲集

3 2 1

價 70 價 70 價 70

價 50 價 0.70

舞へ！
純眞な乙女よ

——六四東振下電 七四〇三下電 教文書院 永坂市上野公園 寛永寺京東市